徳島市埋蔵文化財発掘調査概要14

2004. 3

徳島市教育委員会

徳島市埋蔵文化財発掘調査概要14

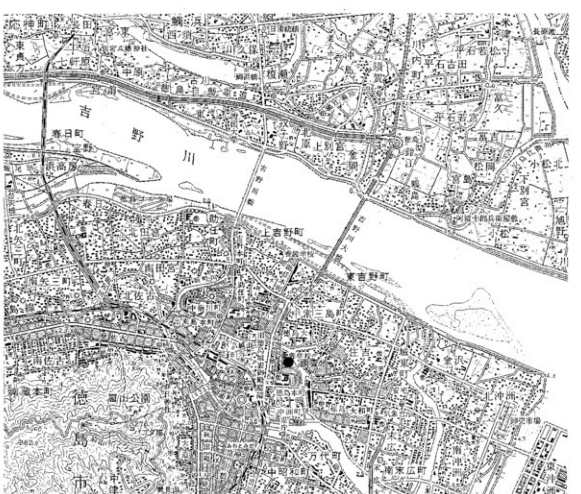
2004. 3

徳島市教育委員会

例　　言

1　本書は徳島市中徳島町に所在する徳島城下町跡の発掘調査概要報告である。1999～2001年度にかけて行った調査の内、2000年度の調査を報告する。
2　報告書作成の費用は徳島市教育委員会の負担による。
3　発掘調査は、徳島市教育委員会社会教育課勝浦康守が行った。
4　本書の編集・執筆は勝浦が行った。また、木簡の釈文については徳島市立徳島城博物館根津寿夫氏より御教示を賜った。御礼申しあげる。
5　木器の保存処理は株式会社京都科学、株式会社吉田生物研究所に委託した。
6　遺構写真、遺物写真の撮影は勝浦が行った。
7　発掘調査で得られた遺物、その他の資料はすべて徳島市教育委員会が保管している。
9　本書の作成に係る作業には調査補助員および作業員諸氏の協力を得た。記して感謝の意を表する。

北條ゆうこ　中西洋子　前田千夏　日下裕子　世直香絵子　余保美代子　近藤八恵子
佐伯俊裕　中野勝美　青木健司　吉田祐子　露口啓子　折野絵美　澤田一人



調査地位置図（国土地理院発行１／50,000「徳島」「川島」縮尺使用）

本 文 目 次

例　言

第Ⅰ章　調査に至る経緯と経過 …… (1)

第Ⅱ章　遺跡の立地と歴史的環境 …… (2)

第Ⅲ章　調査の結果 …… (4)

第1節　層序の概要 …… (4)

第2節　遺構と遺物 …… (6)

i）2000a 調査区の検出遺構と遺物 …… (6)

1）池 SN1071 …… (6)

2）土壙 SK1028・1097・1076・1003-5・1004・井戸 SE1098・造成跡 …… (18)

ii）2000b 調査区の検出遺構と遺物 …… (24)

1）土壙 SK1029 …… (24)

2）土壙 SK1006・1026・1010・1002・1007・1013 …… (41)

3）道路 ST1001側溝 SD1000・1001・SD1002・1003・1010・1015 …… (45)

第3節　調査成果のまとめ …… (49)

挿図図版

写真図版

挿図目次

図1　調査地の位置（上）と調査地の配置（下）
図2　2000a 調査区南壁（上）・2000b 調査区南壁（下・一部）断面土層図
図3　2000a 調査区検出遺構
図4　池 SN1071
図5　池 SN1071出土遺物
図6　池 SN1071出土遺物
図7　池 SN1071出土遺物
図8　池 SN1071出土遺物
図9　池 SN1071出土遺物
図10　池 SN1071出土遺物
図11　土壙 SK1028出土遺物
図12　土壙 SK1097出土遺物
図13　土壙 SK1076出土遺物
図14　土壙 SK1003-5（289～292）、SK1004（293）、井戸 SE1098(294)、造成土(295・296)出土遺物
図15　2000b 調査区検出遺構
図16　土壙 SK1029出土遺物
図17　土壙 SK1029出土遺物
図18　土壙 SK1029出土遺物
図19　土壙 SK1029出土遺物
図20　土壙 SK1029出土遺物
図21　土壙 SK1029出土遺物
図22　土壙 SK1029出土遺物
図23　土壙 SK1029出土遺物
図24　土壙 SK1029出土遺物
図25　土壙 SK1029出土遺物
図26　土壙 SK1006（527～536）、SK1026（537～544）、SK1010（545～547）出土遺物
図27　土壙 SK1002（548～558）、SK1007（559～563）SK1013（564～577）出土遺物
図28　溝 SD1001（578・579）、SD1002（580～598）、SD1003（599・600）、SD1010（601～627）出土遺物
図29　溝 SD1010（628・629）、SD1015（630～648）出土遺物

図版目次

1　上：池 SN1071
　下：池 SN1071階段部
2　上：池 SN1071
　下：池 SN1071堆積状況
3　上：池 SN1071石組状況
　下：池 SN1071石組断割り
4　上：土壙 SK1028遺物出土状況
　下：土壙 SK1028遺物出土状況
5　上：壙 SK1003-3～1003-5遺物出土状況
　下：壙 SK1003-3～1003-5遺物出土状況
6　上：土壙 SK1004遺物出土状況
　下：土壙 SK1054遺物出土状況
7　上：井戸 SE1098
　下：井戸 SE1098
8　上：造成状況
　下：造成状況
9　上：土壙 SK1029遺物出土状況
　下：土壙 SK1023遺物出土状況
10　上：土壙 SK1005～1007遺物出土状況
　下：壙 SK1006遺物出土状況
11　上：道路 ST1001
　下：道路 ST1001
12　上：道路 ST1001石組側溝 SD1000
　下：道路 ST1001石組側溝 SD1000
13　上：道路 ST1001石組側溝 SD1001
　下：道路 ST1001石組側溝 SD1001
14　上：道路 ST1001石組側溝 SD1001
　下：道路 ST1001暗渠
15　上：溝 SD1001～1003
　下：溝 SD1015
16　池 SN1071出土遺物
17　池 SN1071出土遺物
18　池 SN1071出土遺物
19　池 SN1071出土遺物
20　池 SN1071出土遺物
21　池 SN1071出土遺物
22　池 SN1071出土遺物
23　池 SN1071出土遺物
24　池 SN1071出土遺物
25　池 SN1071出土遺物
26　池 SN1071出土遺物
27　池 SN1071出土遺物
28　池 SN1071出土遺物
29　土壙 SK1028出土遺物
30　土壙 SK1097出土遺物
31　土壙 SK1076出土遺物
32　土壙 SK1076出土遺物
33　土壙 SK1003-5（280～291）、井戸1098（294）出土遺物
34　土壙 SK1003-5（292）、SK1004（293）、造成土（295・296）出土遺物
35　土壙 SK1029出土遺物
36　土壙 SK1029出土遺物
37　土壙 SK1029出土遺物
38　土壙 SK1029出土遺物
39　土壙 SK1029出土遺物
40　土壙 SK1029出土遺物
41　土壙 SK1029出土遺物
42　土壙 SK1029出土遺物
43　土壙 SK1029出土遺物
44　土壙 SK1029出土遺物
45　土壙 SK1029出土遺物
46　土壙 SK1029出土遺物
47　土壙 SK1029出土遺物
48　土壙 SK1029出土遺物
49　土壙 SK1029出土遺物
50　土壙 SK1029出土遺物
51　土壙 SK1006出土遺物
52　土壙 SK1026（537～544）、SK1010（545～547）SK1002（548～558）出土遺物
53　土壙 SK1007（559～563）、SK1013（564～577）出土遺物
54　溝 SD1001（578・579）、SD1002（580～598）、SD1003（599・600）、SD1010（601～605）出土遺物
55　溝 SD1010出土遺物
56　溝 SD1015出土遺物

報告書抄録

ふりがな	とくしましまいぞうぶんかざいはっくつちょうさがいよう
書名	徳島市埋蔵文化財発掘調査概要
副書名	
巻次	14
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	勝浦康守
編集機関	徳島市教育委員会
所在地	〒770−8571　徳島市幸町２丁目５番地　　TEL　088−621−5418
発行年月日	西暦　2004年３月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
とくしま 徳島 じょうかまち 城下町跡	とくしまけんとくしまし 徳島県徳島市 なかとくしまちょう 中徳島町	36201	−	34度 15分 52秒	134度 33分 40秒	20000701〜 20010331	1,600	音楽ホール建設工事に伴う事前調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
徳島 城下町跡	城下町跡	中世 近世	土壙・井戸・溝 池・道路	陶磁器・瓦 木製品・金属器 石製品	

第Ⅰ章　調査に至る経緯と経過（図１）

徳島市中徳島２丁目に所在する旧徳島文化公園跡（旧動物園跡・旧児童公園跡・旧街区公園跡）は安政年間（1854～1860）の絵図である「御山下島分絵図・徳島」から徳島藩士の屋敷跡に該当する地域とされる。この敷地が音楽ホールの建設候補地となったことから、1998年10月に試掘調査を行い、遺構と遺物を確認することにより、当地の開発に際しては埋蔵文化財包蔵地として留意する必要が生じた。ただし、近代以降の諸開発や戦後の都市復興、そして、旧徳島文化公園の建設等さまざまな都市開発の流れの中での遺跡の破壊が免れきれていないのも事実であった。試掘調査の成果に基づき、敷地内で遺構の残存が良好な地区（４地区）を設定し、1999～2000年度にかけての調査計画を策定した。

1998年度にすべての建物の解体撤去が完了し、1999年度は旧徳島文化公園跡地の南西部、かつては旧動物園の広場として利用されてきた箇所で調査を行った。近代以降の攪乱が見られるものの遺跡に与えるダメージは少なく、遺構の残存状況は非常に良好であった。特に、徳島藩士酒部家屋敷裏で確認された池状遺構からは、廃棄された陶磁器とともに多数の荷札木簡が発見された。中でも、徳島藩における地方知行制に関する内容の木簡が含まれていたことの評価は大きい。さらに、天正15(1585)年の蜂須賀入府以前に遡る中世末期の遺構が確認され、近世徳島城下町以前の当地の状況を知る貴重な成果を得た。

1999年度の調査は500㎡を対象に６～10月まで行い、11～12月に荷札木簡が出土した池状遺構の全容を把握するための拡張調査を行い、一旦終了した。2000年１月に敷地内で再び試掘調査を行った。これは1998年度の試掘調査は旧動物園の施設の解体撤去以前であったため、通路や空地部分など建物以外の限られた箇所での試掘にとどまった経緯があることから、遺構確認のための補足調査である。特に、絵図との照合から敷地内に存在する徳島城総構石垣の確認を目的として行った。その結果、上部が壊れされているものの石垣の一部を確認した。敷地内における石垣の全容を確認するための必要性が生じたので当初の調査計画を１年延長し2001年度まで調査を行うことの調整を図った。

2000年度の調査は旧街区公園跡の850㎡と旧動物園跡750㎡の計1600㎡を対象に2000年７月～2001年３月まで行った。旧街区公園跡地は徳島藩士寺澤家屋敷の表側にあたることから建物跡の確認が予想された。街区公園として利用されていたことから遺跡の残存状況は良好かと予想されたが、調査地が屋敷地表側にあたることから、近代以降、家屋の建替に伴う大規模な土地の改変が行われていた。しかし、屋敷裏では廃棄土壙や井戸、また屋敷表に造られた石組池からは酒部家屋敷と同様に荷札木簡が発見された。また、徳島城下町建設に伴う造成の痕跡が認められるなどの成果を得た。

一方、旧動物園跡地での調査も攪乱が著しく見られた。寺澤家屋敷は屋敷地裏側も道路に面することから道路跡の一部を確認した。道路跡は石組の両側溝を持つ構造であるが、近代以降も改修使用されていた。

2001年度は1999年度の試掘調査で明らかになった徳島城総構石垣の調査であり、旧動物園跡地において600㎡を対象に８～11月まで行った。調査は石垣基底部を確認するため旧河川（旧助任川）の掘削であり、1999年度の試掘調査時に湧水が著しく大量の排水処理の必要性を得ていたので、調査を行うにあたりウエルポイント工法を採用した。上部が壊れているが石垣の全容や石垣底部の状況、河床への捨石の状況を確認した。

以上、1998年度の試掘調査以来、2001年度の徳島城総構石垣の調査に至るまで、約3,000㎡の発掘調査を断続的に行い貴重な調査記録と出土遺物を得た。

第Ⅱ章　遺跡の立地と歴史的環境（図１）

天正13（1585）年、秀吉による四国平定後、同年、阿波国17万５千石の領主となった蜂須賀家政は阿波国入府後、ただちに徳島城の建設と城下町の整備を進める。徳島城は標高61ｍの城山が位置する徳島に築かれ、蜂須賀入府の翌年には城の大部分は完成したとされる。徳島城は城山山上に本丸、天守が築かれた東二の丸、西二の丸、西三の丸、山下に表御殿、西の丸御殿が置かれた平山城であり、城の周囲には助任川や寺島川などの自然河川を外堀とした防御態勢をとる。徳島城東側の徳島地区、西側の瓢箪島には武家屋敷が置かれることから、城の東と南側は堀と石垣、西側は石垣により武家地と界する。

慶長５（1600）年、関が原の合戦時には蜂須賀家政は領地を豊臣方に返還し、家政の実子至鎮を徳川方に付けることにより、同年、再び、阿波国17万５千石を拝領する。元和元（1615）年、大阪夏の陣の功績により淡路国８万２千石を加増され、25万７千石の近世大名としての基盤をつくる。以降、徳島城の石垣の拡張や補修、城下町常三島、住吉島、富田、前川・助任地区では屋敷地の拡張が進む。

明治維新後、明治２（1879）年の廃藩置県に伴い徳島城の諸施設は大手門として鷲の門を除いてすべて解体され、鷲の門も戦災により消失する。現在、当時の面影として表御殿庭園、堀と石垣だけが残る。なお、徳島城築城以前の城山周辺には至徳２年（1385）細川頼之による渭山城があったとされるが明確ではない。

一方、徳島城下町は旧吉野川下流域に形成された標高 T.P.±０ｍを測る島状の低位沖積地を基盤とする島普請に特徴がある。徳島城下町は徳島城が置かれた徳島を中心に、寺島、常三島、福島、住吉島、瓢箪島、出来島さらには周辺の助任前川、新町、富田、佐古にまで武家屋敷や町屋が広がる。徳島城下町跡は現在の徳島市街地のほぼ中心部と重複し、江戸時代の町割りを継承している。徳島城下町跡は近代以降の都市開発や戦後の復興、さらには現代における諸開発において遺跡は大規模に壊されてきた経緯があり、近世城下町跡としての認識も永く不充分であった。しかし、1990年代以降、県教委・市教委・徳島大学が城下町跡の調査に着手し、近世徳島の歴史に対し貴重な資料が蓄積され始め、今日、その調査事例は確実に増加している。

旧徳島文化公園跡の所在地は、寛永年間の「忠英様御代御山下絵図」、正保３（1646）年の「阿波国徳島之図」、寛文５（1665）年の「阿国渭津城之図」、天保３（1683）年の「阿波国渭津城下之図」においてはいずれも侍屋敷と記されており、徳島城の東側の徳島地区は当初より武家地として整備されたことがわかる。元禄４（1691）年の「綱矩様御代御山下絵図」には、徳島藩士の酒部舎人（酒部家３代・1800石）、寺澤源右衛門・寺澤主馬（寺澤家４代・532石余、５代・532石余）の名が記され、また、安政年間（1854～1860）に描かれた「御山下鳥分絵図」（徳島）にも、酒部丹後（酒部家９代・1500石）と寺澤弥次右衛門（寺澤家９代・532石余）の名が記されていることから、江戸時代を通じて屋敷替が行われることなく酒部・寺澤の両家の屋敷地であったことがわかる。

酒部家は初代が酒部勘左衛門と称し、寛永17年に召出れ、当初200石高である。２代酒部舎人が中老・仕組頭・裁許奉行の役に就き1800石高となる。以後、酒部家は寄合席・小普請組頭・旗組頭などの役に就き、９代酒部丹後が1500石、宗門改奉行・年寄役に任ぜられている。一方、寺澤家は初代が梯弥次右衛門と称し、3500石高の仕置奉行・国奉行・安宅御用・小姓頭の役に就いている。２代寺澤主馬が530石となるが、寺澤家は小姓役・鉄砲組頭・普請奉行・町奉行などの役に就き、９代寺澤主馬が532石の町奉行の役に就いている。調査地は徳島惣構に位置することから酒部や寺澤家のような上級藩士の屋敷が建ち並ぶ地区である。

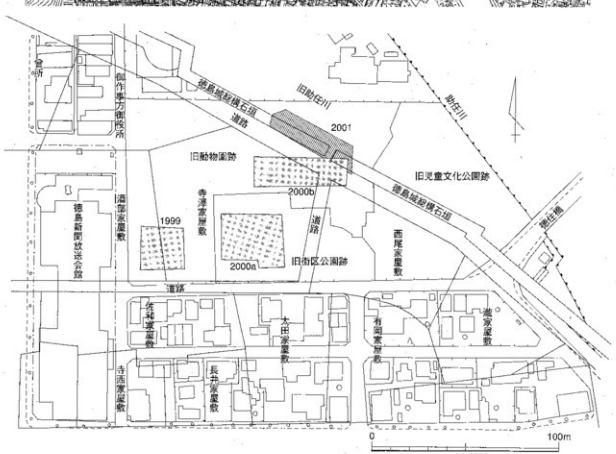


図1　調査地の位置（上）と調査地の配置（下）

第Ⅲ章　調査の結果

第１節では層序の概要を記し、第２節以降で検出された遺構と遺物について示していく。検出遺構と出土遺物については、良好な一括資料に限定し提示する。なお、今回は2000年度の調査について報告し、2001年度の調査については次報告で行うこととする。

第１節　層序の概要（図２）

2000a 調査区ではほぼ全面的に土地が攪拌され、2000b 調査区でも中央～東域において近現代の撹乱がみられる。ただ、徳島城下町跡での遺跡の残存状況としては通常的である。良好な状況で地層が確認されている2000a 調査区の南壁断面および2000b 調査区の南壁（一部）断面をとりあげて基本層序としての概要を示すことにする。

① 2000a 調査区の基本層序

第 0 層：現代盛土および撹乱で層厚は80～120cmである。

第1-a層：淡黄色シルトとにぶい黄色シルトが混在する整地層で、層厚15～20cmである。

第1-b層：浅黄色砂礫混じりシルトで池 SN1071上の整地層で、層厚30cmである。

第1-c層：灰白色砂礫混りシルトで池 SN1071上の整地層で、層厚10cmである。

第2-a層：灰色細～粗砂の整地層で、層厚10cmである。

第2-b層：灰白色粘土質シルト～細～粗砂のシルト優勢の整地層で、層厚20cmである。

第2-c層：オリーブ黄色シルト～灰色細～粗砂の整地層で、層厚20～30cmである。

第2-d層：灰色細砂～シルトのシルト優勢の整地層で、層厚20～30cmである。池 SN1071の切り込み面である。

第 3 層：淡黄色粘土質シルトで、層厚20～50cmである。徳島城下町の建設初期の造成土と考えられる。遺構検出ベース層である。

第 4 層：灰色～明緑灰色～明オリーブ色シルト～シルト質粘土で、下位へ砂礫層へ漸移的に変化する。T.P. ±0m付近から湧水が著しい。

② 2000b 調査区の基本層序

第 0 層：現代盛土および撹乱で層厚は80～150cmである。

第1-a層：にぶい黄褐色砂質シルトの整地層で、層厚10～30cmである。

第1-b層：暗灰色色砂礫混じりシルトの整地層で、層厚10～20cmである。

第1-c層：灰黄褐色砂質シルトの整地層で、層厚10cmである。

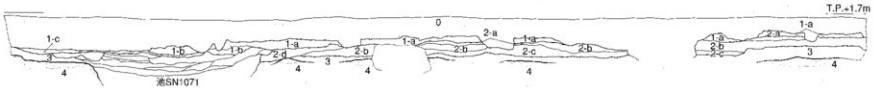
第1-d層：黄灰色砂質シルトの整地層で、層厚５～10cmである。

第2-a層：浅黄色細砂～シルトの整地層で、層厚20～30cmである。この層を切り込む SK1046より18世紀後葉の遺物が出土していることから、18世紀中葉以前の整地層と考えられる。

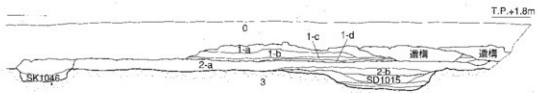
第2-b層：浅黄色粘土質シルトで、溝 SD1015上の整地層で、層厚５～20cmである。

第 3 層：明黄褐色粘土質シルトで、下位へ砂礫層へ漸移的に変化する。遺構検出ベース層である。

2000年の調査区では、1999年の調査でみられた最下層での良好なシルト層の堆積はみられず、この地域は城山の東南域のシルト堆積の良好な領域から外れるものと考えられる。そして、この低位地を屋敷地として整備するため、旧助任川に対して大規模な造成（2000a の第３層）が行われ、城下町建設当初に行われた造成により旧地形による高低差は解消される。ただ、旧助任川に近づく2000b の調査区ではこの造成はみられない。2000b の調査区は寺澤屋敷の裏側にあたることから、屋敷表側との造成に対する意識の違いを表していると考えられる。当初の造成の有無の差が、後に至るまで屋敷内で50cm程度の比高差として生じている。



0 ：現代盛土および撹乱
1-a：淡黄色シルトとにぶい黄色シルトの混在
1-b：浅黄色砂礫混りシルト（池 SN1071上の整地層）
1-c：灰白色砂礫混りシルト（池 SN1071上の整地層）
2-a：灰色細～粗砂（整地層ー砂）
2-b：灰白色粘土質シルト～細～粗砂（整地層ーシルト）
2-c：オリーブ黄色シルト～灰色細～粗砂（整地層ー砂）
2-d：灰色細砂～シルト（整地層ーシルト）
3 ：淡黄色粘土質シルト（初期造成土）
4 ：灰色～明緑灰色～明オリーブ灰色シルト～シルト質粘土（砂礫層へ漸移的に変化する）



0 ：現代盛土および撹乱
1-a：にぶい黄褐色砂質シルト（整地層）
1-b：暗灰色砂礫混りシルト（整地層）
1-c：灰黄褐色砂質シルト（整地層）
1-d：黄灰色砂礫混りシルト（整地層）
2-a：淡黄色細砂シルト（18c 中葉以前の整地層）
2-b：淡黄色粘土質シルト（溝 SD1015上の整地層）
3 ：明黄褐色粘土質シルト（砂礫層へ漸移的に変化する）

図２　2000a 調査区南壁（上）・2000b 調査区南壁（下・一部）断面土層図

第２節　遺構と遺物

ｉ）2000a 調査区の検出遺構と遺物

現代盛土・撹乱および整地層（第１層～第2-d層）除去後の第３層上面において検出した遺構と遺物である。検出遺構には徳島藩士である寺澤家の屋敷において確認した池、土壙、井戸がある。

1）池 SN1071（図３・４～10、図版１～３・16～28）

調査区外に広がることから平面形は不明であるが、確認した掘形の平面形は、長さ8.8m、幅7.3mの∩形を呈し、石組の護岸をもつ池である。屋敷表側に位置し、屋敷前面には道路が通ることや石組の平面ラインが若干東へ緩やかな曲がりをみせていることから心字形の池が考えられる。

北面の護岸の一部は階段状に造られて、水際まで下りられる構造である。階段は長さ2.3m、高低差1.2mの６段分を確認しているが、最下段は池底に一枚板を敷いたものである。また、北面の石組に対し直角方向ではなく、やや斜位に階段は造られる。階段幅は最上段で70㎝であるが、５段目では1.5mと広くなる。ステップ幅は30～40㎝で、段差は20㎝である。北面の石組は板状に加工した石材を使用し、面を揃えて積み上げるが、東西面には粗割りした大きな石材を用い、東面の石組は大きく膨らみ、また、西面は抉り込むように積まれている。階段をもつ北面と東・西面とでは石組の積み方が異なる。裏込めに栗石は使用されない。また、池底には敷石はみられず素掘りのままである。

池底には層厚60㎝以上のシルト層と層厚20～30㎝の植物腐敗層が堆積し、最終的には層厚40㎝の整地により平坦化される。出土遺物は18世紀前葉の一括資料である。以下、遺物の概要を示す。

図４　池 SN1071

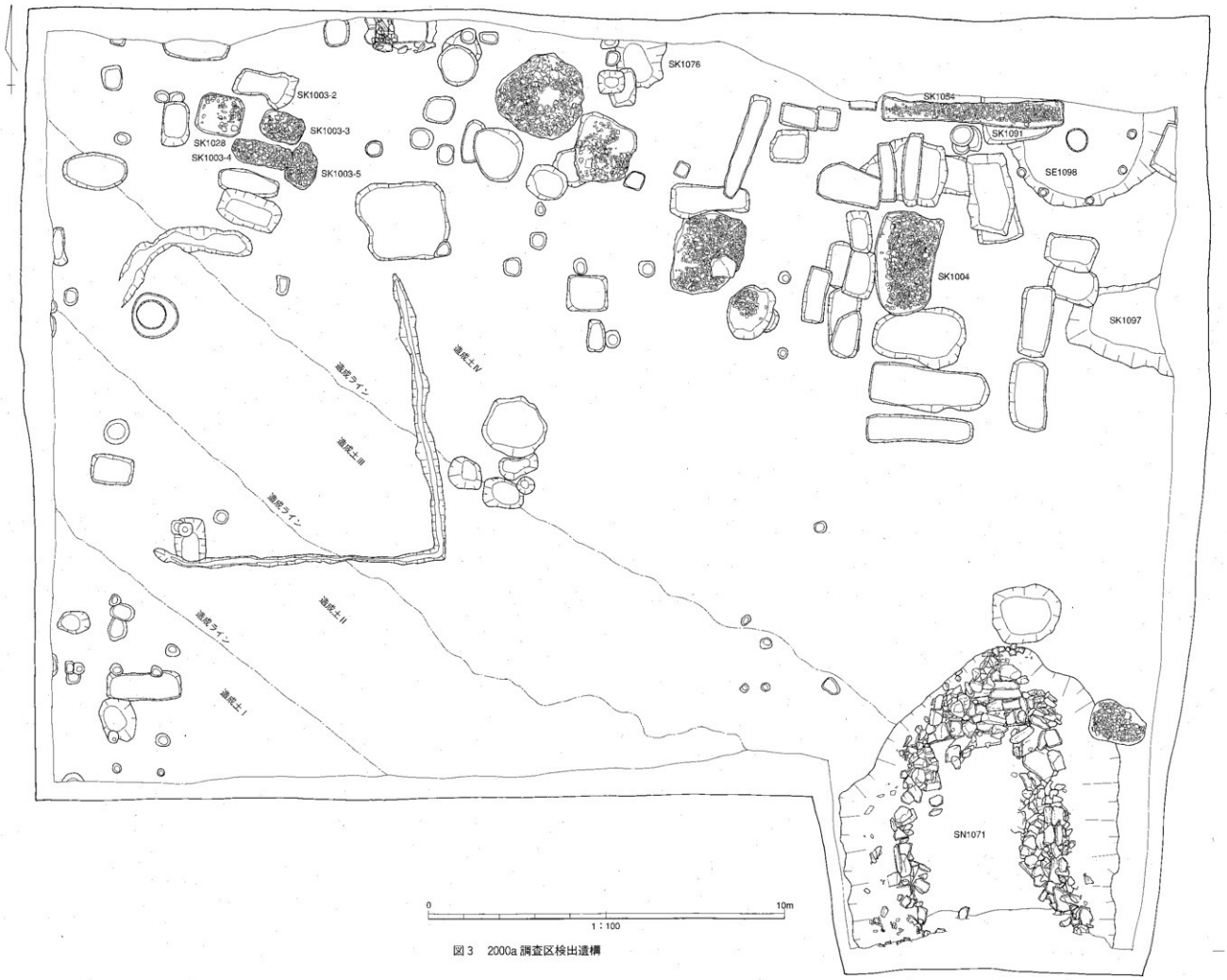


図3　2000a 調査区検出遺構

肥前系陶器碗1～4・6・8・13・14・23～32、皿54・55・57・58・60～62、鉢63・67・68・175磁器碗5・7・9～12・15～22、蓋物33・50・64、小坏34～43・46～49・51～53、猪口44・45、皿56・59・66・109～116、鉢65、瓶70、仏飯器71、筒形72、蓋96～107、京信楽系陶器碗73～84、半筒形碗87～93、皿94・95、産地不明陶器碗85・86、土師質皿117～166、備前皿167・168、灯明受皿169、蓋170、鉢171、瓶172、丹波擂鉢173、堺明石系擂鉢174、硯176～178、土人形199、土面180、鳩笛181、加工円盤182～186、銅製金具187、軒丸瓦188～192、漆器椀193～197、蓋198、木簡199～202がある。

1～4・6・8・13・14は陶胎染付である。1・2は外面に山水文、畳付無釉で離れ砂が付着している。3・8は外面に連続唐草文、畳付無釉。3は離れ砂が付着し、見込みに降灰がみられる。4は外面に草花文、畳付無釉で離れ砂が付着している。6は外面に笹・梅文、畳付無釉である。13・14は外面に圏線、畳付無釉で、14は離れ砂が付着している。

5・7・9～12・15～18は染付である。5は外面に魚・一重網目文、畳付無釉で離れ砂が付着している。9は外面草花文、高台内一重圏線、畳付無釉である。10は外面に二重網目文、口縁部外面に四方襷文、高台内は二重方形枠内に渦福、畳付無釉である。11・12は外面に草花文、11の高台内は一重圏線内に崩し字による「大明年製」銘、畳付無釉で離れ砂が付着している。15・16は外面に唐子、見込みは二重圏線内に唐子、高台内は二重圏線内に「碧玉珍玩」銘、畳付無釉である。17は外面に草花文、口縁部内面に四方襷文、見込みは二重圏線内に手描き五弁花文、高台内は一重圏線内に二重方形枠内渦福、畳付無釉である。18は外面に区画内に草花文、円形窓内に梅・鶯、口縁部内外面に四方襷文、見込みは二重圏線内に梅・鶯、高台内は二重圏線内に「富貴長□」銘、畳付無釉である

19～21は青磁染付で、19・20は口縁部内面に鋸歯状の四方襷文、口縁部は口錆、見込みは二重圏線内に手描き五弁花文、高台内は一重圏線内「大明成化年製」銘、畳付無釉で、19は離れ砂が付着している。21は口縁部内面に四方襷文、見込みは二重圏線内に手描き五弁花文、畳付無釉である。22は白磁で畳付無釉である。

23は京風碗で淡黄色硬質胎土に灰釉をかけ、高台無釉、高台内に「栄」の刻印がある。24・25は呉器手で、畳付無釉で離れ砂が付着している。

26は赤褐色の硬質胎土に鉄釉をかけ、内外面に白泥による波状の刷毛目文、畳付無釉である。27は灰褐色の硬質胎土に鉄釉をかけ、内外面に白泥による刷毛目文を施す。畳付無釉で離れ砂が付着している。28は灰色の硬質胎土に鉄釉をかけ、口縁部に白泥を流しかける。畳付無釉で離れ砂が付着し、見込みに降灰がみられる。29は内外面に白泥を練り込んだような文様が施される。高台畳付の幅が広く、畳付～高台内にも白泥の指じり文様がみられる。30は鉄釉をかけ、外面に白泥による波状の刷毛目文、内面は打刷毛文で、畳付無釉である。31・32は鉄釉をかけ、畳付無釉で離れ砂が付着している。

31は外面に白泥による花文を配し、内面は刷毛目文、口縁部には白泥を流しかけする。32は外面に白泥による花文を配し、内面は白泥による渦巻文である。

33は3箇所の円窓に松竹梅文を描く。口縁部内面無釉、畳付無釉で離れ砂が付着している。

34～39は外傾する体部から外反する口縁部を呈する。34・36は白磁で、畳付無釉で離れ砂が付着している。35・38は外面に笹文、39は折松葉文、畳付無釉で離れ砂が付着している。

40は口縁部が外反し、外面に蝶・草花文、畳付無釉である。

41～45は体部が外方へ直線的に立ち上がる。41は外面に雨降文・花文、43は雨降文・圏線、いずれも畳付無釉であるが、43は離れ砂が付着している。42は外面に扇・萩唐草文、畳付無釉である。

44は白磁で、畳付無釉である。45は体部外面に草花文・圏線、高台内は一重圏線で、畳付無釉である。

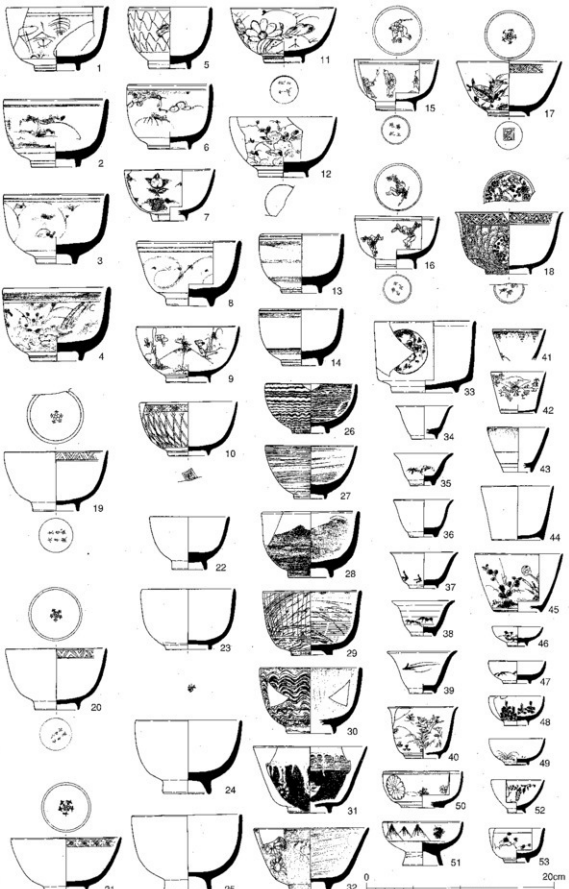


図5　池 SN1071出土遺物

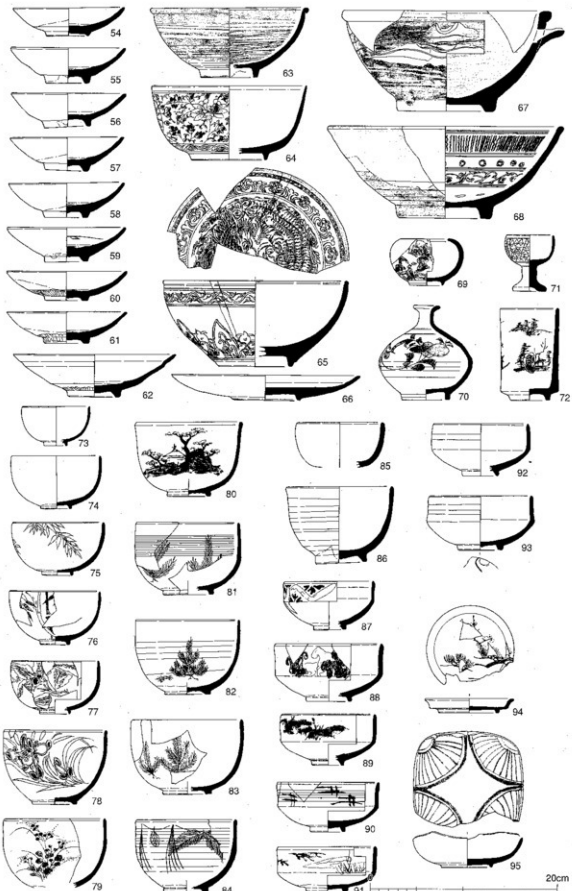


図6　池 SN1071出土遺物

46・48は外面に蝶・草花文、47は笹文、49は草花文、いずれも畳付無釉である。

50は外面に菊・花文、口縁部無釉、蛇ノ目高台で畳付無釉である。51は台付坏で、畳付無釉で離れ砂が付着している。52は内面に藤、53は外面に梅、50～52は畳付無釉である。

54・55・57・58・60・61は灰白色の硬質胎土に灰釉をかけた後、内面に銅緑釉をかけ、見込みに蛇ノ目釉剥ぎを施す。いずれも高台無釉で、58の畳付と60・61の見込みに離れ砂が付着、54・55・58の見込みには重ね焼きの痕跡がある。54・55・57・58の高台内には円錐状のケズリ残し痕がある。

56は白色釉をかけ、見込みに蛇ノ目釉剥ぎを施す。高台無釉で、見込みに重ね焼きの痕跡がある。

59は染付で、見込みは蛇ノ目釉剥ぎ、重ね焼きの痕跡があり、高台無釉である。

62は灰白色の硬質胎土に黄灰色釉をかけ、口縁部外面に凹線、口縁部内面に沈線状の段が生ずる。見込みに蛇ノ目釉剥ぎを施し、釉剥ぎ部に鉄釉を塗る。見込みに重ね焼きの痕跡、高台無釉である。

63は黄橙色の硬質胎土に鉄釉をかけ、白泥による刷毛目文を内外面に施す。口縁部は外側へ折り曲げ玉縁状を呈する。見込みに蛇ノ目釉剥ぎを施し、重ね焼きの痕跡がある。高台無釉で畳付に白泥が付着している。

64は染付で、外面に花唐草文・渦巻文、高台内は一重圏線で畳付無釉である。口縁部内面無釉である。

65は染付で、口縁部内面に1条沈線、口錆である。畳付無釉で焼き継ぎの痕跡がある。

66は白磁で、畳付無釉で離れ砂が付着している。

67は橙色の硬質胎土で、外面は鉄釉をかけた後、白泥による波状文、内面は白泥による刷毛目文を施す。口縁部は玉縁状で無釉、高台無釉である。口縁部やや下がった位置に穿孔を施し、外面に注口を貼り付ける。68は三鳥手である。橙色の硬質胎土で、外面は鉄釉と白泥を塗り、内面に白泥による象嵌を施す。高台内に鉄釉が塗られ、畳付無釉である。見込みに8箇所の目跡がある。

69は染付で、外面に唐子、高台内は二重圏線で畳付無釉である。

70は染付の油壺で、外面に草花文、畳付無釉で離れ砂が付着している。

71は染付で、外面に氷裂文、畳付無釉である。

72は染付で、外面に山水文、畳付無釉で離れ砂が付着している。

73は灰黄色の胎土に灰釉をかけ、高台無釉である。外面に上絵の痕跡がある。74・75は淡黄色の胎土に灰釉をかけ、高台無釉で高台内に同心円状のケズリ痕がある。75の上絵には笹が描かれているが、発色が消失している。

76・77は淡黄色の胎土に鉄釉をかけ、高台無釉である。76は緑色の笹に金色を上掛けし、高台内に同心円状のケズリ痕がある。77は緑・黒・褐色による草花文の上絵を施す。78は淡黄色の胎土に灰釉をかけ、外面に赤・緑・金・黒色による花文の上絵を施す。高台無釉、高台内に巴形のケズリ痕がある。

79・80は灰白色の胎土に灰釉をかけ、79は鉄絵の草花文、80は鉄絵と呉須の山水文の上絵を施す。80は高台無釉で高台内に円錐状のケズリ痕がある。

81は灰白色の硬質胎土に灰釉、82・83は淡黄色の硬質胎土に灰釉をかけ、80・81は外面に鉄絵、82は鉄絵と呉須の若松文の上絵を施す。いずれも外面のロクロ目が顕著である。高台無釉で、82の高台内には巴形のケズリ痕がある。

84は灰白色の硬質胎土に灰釉をかけ、鉄絵・呉須の注連縄文の上絵を施す。外面のロクロ目が顕著で高台無釉である。

85は灰白色の硬質胎土で、内外面に鉄釉をかける。

86は灰色の硬質胎土に灰白釉をかける。外面のロクロ目が顕著である。高台無釉で高台外面に2箇

所の工具によるケズリ痕、高台内に巴形のケズリ痕がある。

87・88・90は灰白色の硬質胎土に灰釉をかけ、外面に鉄絵と白泥による上絵を施す。いずれも高台無釉で、90は高台内に同心円状のケズリ痕、見込みに目跡が2箇所ある。89・91・92は黄灰色の硬質胎土に灰釉をかけ、89は鉄絵、92は鉄絵と白泥の上絵を施す。89と92は同一個体の可能性がある。いずれも高台無釉で、89は見込みに1箇所、91は見込みに3箇所の目跡がある。91は高台内に同心円状のケズリ痕がある。93は灰色の硬質胎土に灰釉をかけ、高台無釉である。見込みに2箇所の目跡、高台内に同心円状のケズリ痕と墨書がある。

94は灰黄色の胎土に灰釉をかけ、見込みに鉄絵の松と白泥の白梅の上絵を施す。高台無釉である。

95は灰白色の硬質胎土に灰釉をかけた型打成形で、内面に鉄絵を施す。高台無釉である。

96は染付で、口縁部内外面に四方襷文、外面は円窓に梅・鶯、見込みは二重圏線内に梅・鶯、高台内は二重圏線内に「富貴長春」銘、畳付無釉である。

97～100は青磁染付である。97・98は口縁部内面に鋸歯状の四方襷文、口錆で見込みは二重圏線内に手描き五弁花文、高台内無釉で一重圏線内「太明成化年製」銘である。99・100は口縁部内面に四方襷文、見込みは一重圏線内に手描き五弁花文、畳付無釉である。

101は灰白色の釉をかけ、口縁部内面が無釉の土瓶の蓋である。

102・103・105～107は染付で、102は外面に唐草文で橋摘み、103は外面に菖蒲、105は草花文、106は梅花・雪輪文・笹、107は花唐草文を描き、橋摘みは欠損している。いずれも口縁部内面は無釉である。104は色絵染付で、外面に染付丸文・赤絵の菊文、摘みは欠損し、口縁部内面無釉である。

108～110・112～116は染付である。108は外面に唐草文、内面は雪輪文に染付丸文と草文、見込みは二重圏線内にコンニャク印判による五弁花文、高台内は一重圏線内「大明年製」銘、畳付無釉で離れ砂が付着し、口錆である。109・110・112は外面に唐草文、内面に半菊文と斜格子文、見込みは二重圏線内にコンニャク印判による五弁花文、見込みは蛇ノ目釉剥ぎが施され、離れ砂が付着している。高台内は一重圏線、畳付無釉で離れ砂が付着している。113は外面に唐草文、高台内は一重圏線内に2箇所のハリ支え痕、畳付無釉で離れ砂が付着している。114は型打成形の輪花口錆である。見込みは二重圏線内に鉢植え花文、畳付無釉で離れ砂が付着している。115は輪花で、外面に唐草文、内面に水草文、高台内は一重圏線内「大明□化年製」銘、見込みに1箇所ハリ支え痕、畳付無釉である。116は外面に唐草文、内面に草花文、見込みは二重圏線内に手描き五弁花文、高台内は一重圏線内に4箇所のハリ支え痕がある。111は見込みに赤・黄色で草花文の上絵を施す。高台内に1箇所ハリ支え痕、畳付無釉である。

117～166は土師質で、底部外面に回転糸切り痕・板目状圧痕、口縁部には灯芯油痕がみられる。

167・168は灯明皿で口縁部に灯芯油痕がみられる。169は仕切りに浅い∪字状の切り込みがある。

170は内外面に重ね焼きの痕跡がある。171は外面にカキ目が施される。172は外面にカキ目を施し、火襷がみられる。

172は淡赤橙色の胎土で、口縁部外面に赤褐色の塗土を施す。擂目は8条単位で、擂目の上端は揃えられず、見込みまで下ろされ雑然とクロスする。174は口縁部外縁帯の張り出しは鈍く、口縁部内面に断面三角形の突帯が廻る。擂目上端にはナデが施されているが、完全には消し揃えられていない。擂目は見込みまで下ろされるが、見込みにはクロスパターン文が施される。

175は褐色の硬質胎土で、外面に鉄釉を底部から流しかけ、口縁部内面に鉄釉をかける。口縁部は逆L字状に外側に貼り付け拡張し、口縁部上下端を押し摘み上げ波状に仕上げる。外面にはカキ目と波状文が施される。

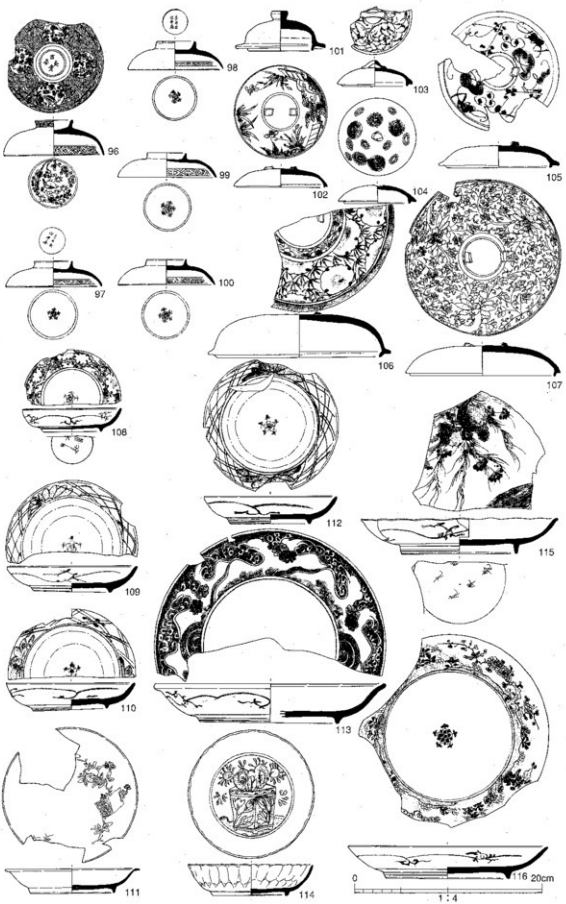


図7　池 SN1071出土遺物

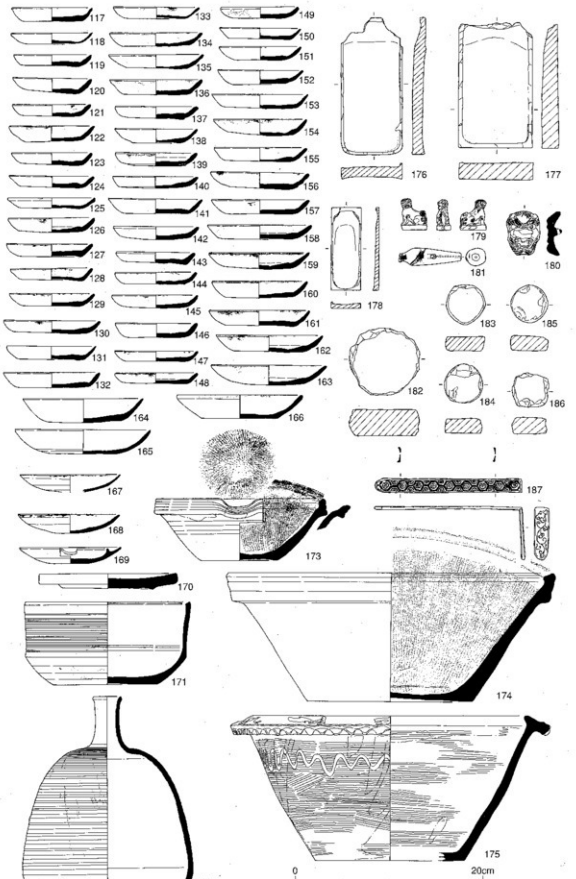


図8　池 SN1071出土遺物

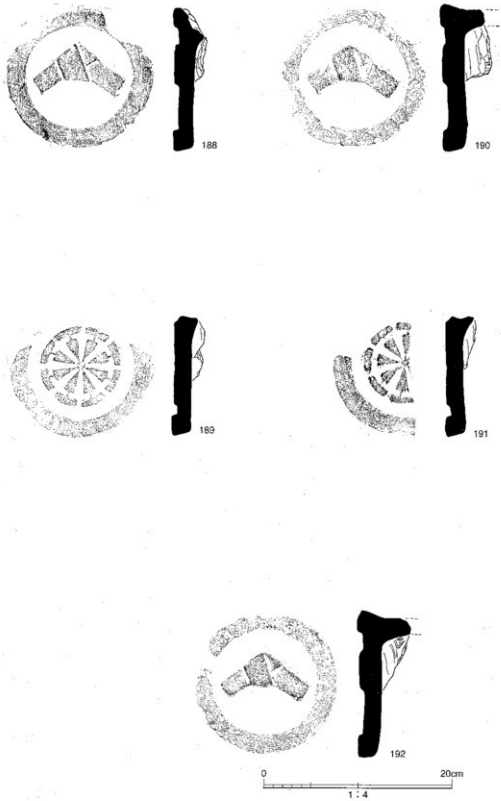


図9　池 SN1071出土遺物

図10　池 SN1071出土遺物

176・177・178は泥岩製の硯で、176は裏面も摩滅している。

179は狛犬で前後型合わせである。180は外型成形で、内面に仕切りがあり上下に穿孔を施す。

181は鳥形の笛である。182～186は瓦片を円盤状に打ち欠き加工を施したものである。

187は銅製の飾り金具で亀甲型の文様が打ち出されている。釘留め用の穴が長辺に2箇所、短辺に1箇所みられる。

188～192は軒丸瓦で、189・191の瓦当面には寺澤家の家紋である重ネ源氏車、188・190・192瓦当面には寺澤家の替紋の丸ノ中結ビ文で飾られる。

193は内外面赤色漆を塗り、外面に黒漆で三方に蛇ノ目を配す。底部に穿孔がある。194は外面黒漆内面赤漆を塗り、外面に蒔絵（変色）で三方に丸ノ中抱キ柊を配す。195は内外面に赤色漆を塗り、外面に黒漆で三方に家紋を配す。196は内外面に赤漆を塗り、外面に黒漆で若松を描く。197は内外面に赤漆を塗る。198は内外面に黒漆を塗り、内外面に蒔絵（金色）で竹・五七桐文を配す。

199～202は荷札木簡である。

199	・「[　　] □□　　大根」		
	（御内カ）	（長×幅×厚）	
	・「[　　] 大根□□本」	212×23×1	
	（二百カ）		
200	・「御奥様へ　岩□十兵衛　内」	209×29×1	
201	・「□五匁」	167×23×1	
202	・「寺澤主馬様　久米六郎兵衛	168×41×6	
	江口弥五右衛門」		
	・「松茸五拾本入　　」		

202は徳島藩士の久米六郎兵衛と江口弥五右衛門が寺澤主馬へ松茸五拾本を贈った内容のものである。久米六郎兵衛は（久米家5代・高150石・寛文2年～延享2年）、木頭代官・洲本本〆役、また、江口弥五右衛門は（江口家3代・高200石・正徳2年～享保20年）、海部上灘御代官・洲本本〆役の職についており、両者は洲本本〆役で接点がある。この二人と同時代の寺澤家の当主は、5代寺澤主馬であり、洲本城下（淡路）の特産品である松茸が贈答されている内容である。年紀資料ではないが、江口弥五右衛門が正徳2（1712）年～享保20（1735）年と存命期間が短いことから、年代観を絞る上で有効な資料である。

2）土壙 SK1028・1097・1076・1003-5・1004・井戸 SE1098・造成跡

いずれも寺澤家の屋敷裏で確認した18世紀中葉～19世紀代の土壙や井戸である。絵図から寺澤家の屋敷内の土地利用状況については、屋敷南側に道路が通ることから、調査区南域が屋敷表にあたり屋敷の家屋部と想定されるが、柱穴や建物跡は確認されていない。これは、近代以降の土地の攪拌によるものと考えられる。そして調査区の北域の屋敷裏では、集中する廃棄土壙、井戸が確認されていることから、遺構の分布状況を考慮することからも屋敷内の土地利用状況が読み取れる。

また、調査区南西域では、土質の異なる帯状の土砂（造成土Ⅰ～Ⅳ）の堆積がみられる。土砂の堆積は、南西から北東方向へ造成土Ⅰ→Ⅱ→Ⅲ→Ⅳの順で土砂の流入が行われており、旧助任川に対し旧地形が低傾斜するこの地域を屋敷地として整備するための大規模な造成跡と考えられる。また、帯状の造成ラインは旧助任川右岸の徳島城惣構石垣に平行する。使用される膨大な土量、質が異なる土砂の使用、土砂流入の方法より、城下町建設当初の計画的な整備の一端を窺うことができる。

SK1028（図３・11、図版４・29）

平面形が長辺1.3m、短辺1.1m、深さ40cmを測る土壙である。

出土遺物には肥前系磁器碗203～208、小坏209～215・218～220、筒形蓋物221、猪口216・222・223皿226・227、蓋228、京信楽系陶器碗224、陶器筆入れ237、産地不明陶器碗225、茶釜236、土師質皿229～235、煙管雁首238・239、乗燭241、土人形240・242、小柄243がある。

203～208は染付である。203は外面に竹・梅文、畳付無釉である。204は外面に蛸唐草文である。205は外面にコンニャク印判による文様、畳付無釉で離れ砂が付着している。206は外面にコンニャク印判による桐文、畳付無釉で離れ砂が付着している。207は雨降文を描く。208は外面に草花文、見込みは蛇ノ目釉剥ぎで離れ砂が付着し、重ね焼きの痕跡がある。畳付無釉で離れ砂が付着している。

209・211～213は染付、210は色絵である。209は外面に草花文、畳付無釉である。211・212は外面に笹文、畳付無釉である。213は外面に折松葉文、畳付無釉である。210は外面に赤絵の草花文を描く。

214～217は体部が外方に直線的に立ち上がる。218～220は口縁部が外反する。214・216・217・220は染付、215は色絵、218・219は白磁である。214・216は草花文、畳付無釉で、216は畳付に離れ砂が付着している。217は雨降文である。215は赤絵で草花文を描く。220は外面に折松葉文、畳付無釉である。218・219は畳付無釉で離れ砂が付着している。

221は染付で、外面にコンニャク印判による桐文を描く。畳付無釉である。

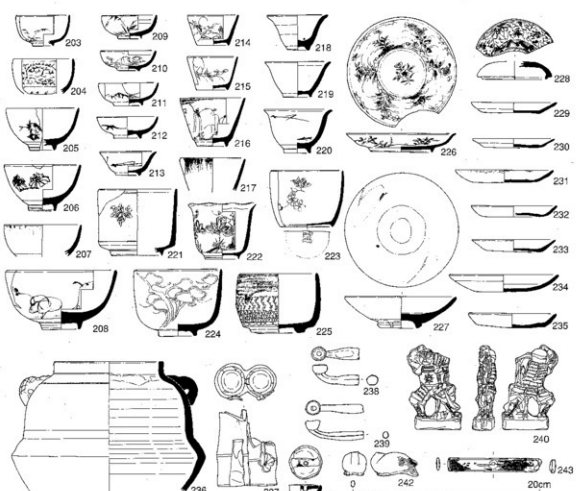


図11　土壙 SK1028出土遺物

222は染付で、体部が直立し口縁部が外反する型打成形の輪花である。外面に松・梅を描き、畳付無釉である。

223は体部が内弯気味に立ち上がる。外面に桜、高台内は一重圏線内に二重方形枠内変形字であり畳付無釉である。

224は淡黄色の硬質胎土に灰釉をかけ、黒・緑色で松の上絵を施す。高台無釉で高台内に巴形のケズリ痕と「京岩倉山」の刻印がある。

225は灰白色の硬質胎土に灰釉をかけ、口縁部外面～内面に鉄釉をかける。体部外面には飛鉋装飾が施される。幅広の高台で、畳付無釉で畳付に3箇所の目跡がある。

226は染付で、外面に草花文、内面に蝶・草花文を描く。畳付無釉である。

227は染付で、見込みは蛇ノ目釉剥ぎ、重ね焼きの痕跡がある。高台無釉である。

228は染付の蓋物の蓋である。外面に花唐草文、口縁部内面は無釉で離れ砂が付着している。

229～223は底部外面に回転糸切り痕、231は底部外面に同心円状のケズリ痕、235は底部外面に板状圧痕がみられる。231は口縁部に灯芯油痕がある。

236は灰白色の硬質胎土で内面に灰釉、口縁部内面～外面に鉄釉をかける。口縁部端面無釉で、肩部に亀形の把手を貼付ける。

237は淡黄色の硬質胎土で、竹筒を3本貼り付ける。外面に灰釉、内面と底部は無釉である。

238・239は銅製の煙管雁首である。

240は前後型合わせ成形の武人である。242は頸部を欠損する鳥である。底部に極小の穿孔がある。

241は土師質で内面に透明釉をかけ、橋渡し状の芯立を貼り付ける。

242は銅製の小柄で兎の装飾が施されている。

SK1097（図3・12、図版30）

長辺2.6m、短辺2.3m、深さ30cmを測る不定形の土壙で、調査地外へ広がる。

出土遺物には、肥前系磁器碗244～248・256・259、筒形碗248、蓋251～255、小坏257、ミニチュア壺258、肥前系陶器碗260、壺266、瀬戸美濃系陶器碗249・261、土師質皿262・263、焼塩壺蓋264、産地不明陶器ミニチュア鍋265がある。

244～247は染付である。244は外面と見込みに松を描く。畳付無釉で焼き継ぎの痕跡がある。245は外面に雲文、内面に龍・雲文を描く。畳付無釉である。246・247は広東碗で、247は外面に柳・瑞鳥見込みは一重圏線内に花文で畳付無釉である。

248は染付で、外面と口縁部内面に輪宝文、蛇ノ目凹形高台である。

249は太白手で、口縁部外面に四方襷文、畳付無釉である。

250～253は染付である。250は外面に人物と筐、見込みは一重圏線内に日輪文、畳付無釉である。

251は外面に鳥・梅、見込みに花文、畳付無釉である。252は碗247の外面と同じ文様である。見込みは一重圏線内に花文、畳付無釉である。253は外面に草花文、高台がハの字状に開き、高台内の文様に続く。見込みに鷺、畳付無釉である。

254・255は白磁であるが、254は内面に草花文の上絵を施している。いずれも畳付無釉で離れ砂が付着している。

256は端反碗で、見込みは二重圏線内に花文、畳付無釉で離れ砂が付着している。

257は白磁で、体部が外方へ直線的に立ち上がり口縁部が外反する。畳付無釉で離れ砂が付着している。

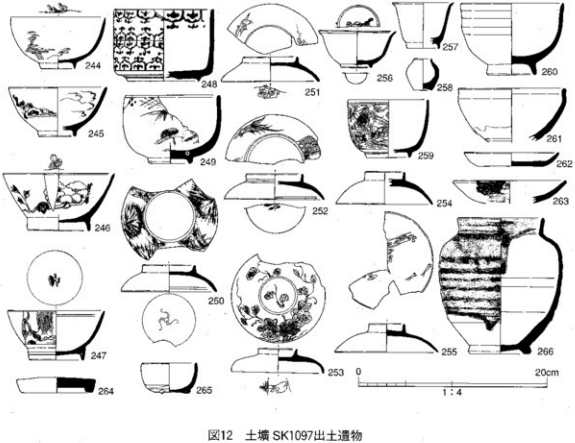


図12　土壙 SK1097出土遺物

258は白磁で、口縁部端面・内面・底部は無釉である。259は染付で、線描きの草花文である。畳付無釉である。

260は淡黄白色の胎土に灰釉をかけた呉器手である。畳付無釉である。

261は灰白色の硬質胎土の底部以外に鉄釉をかけた天目碗である。

262は底部外面に回転糸切り痕、263は外面に煤が付着している。

264は内面に布目圧痕がある。

265は灰黄色の硬質胎土の底部以外に鉄釉をかけ、底部に三足を貼り付ける。

266は短く直立する口頸部をもち、淡橙色の硬質胎土に鉄釉、口縁部内面～体部外面に飴釉をかける。畳付無釉である。

SK1076（図3・13、図版31・32）

長辺1.3m、短辺1.2m、深さ40cmを測る不整方形状の土壙で、調査地外へ広がる。

出土遺物には、肥前系磁器碗267・268・271、小坏272～275、香炉276、肥前系陶器碗269・270、瓦質焜炉277、土師質皿278～283、焙烙284・285、土人形286～288がある。

267は染付で、体部外面にコンニャク印判による文様を施す。畳付無釉である。

268は色絵染付で、体部外面に宝珠・瑞鳥を描き、赤・黄色で上絵を施す。畳付無釉で高台内は一重圏線内「成化年製」銘である。

269は黄白色の硬質胎土に灰釉をかける。高台無釉で高台内に円刻と「森」の刻印がある。

270は陶胎染付で、外面に山水文、畳付無釉で離れ砂が付着している。

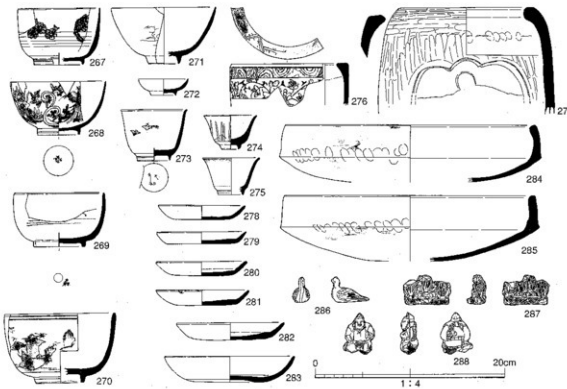


図13　土壙 SK1076出土遺物

271・272は白磁であるが、272は外面に上絵の痕跡があり、畳付無釉である。272は畳付無釉で離れ砂が付着している。

273は染付で、体部が直立し口縁部が外反する。外面に鳥文、畳付無釉で離れ砂が付着している。高台内は一重圏線内に崩れた「大明年製」銘である。274は体部に鎬文のヘラ彫りを施す。高台無釉である。276は染付で、外面に花唐草文、内面は口縁部以下が無釉である。

277は瓦質である。円筒形の体部で口縁部が内傾する。前面に雲形の火炊窓、背面に円形の小穴がある。口縁部外面に横方向のヘラミガキ、体部外面に縦方向のヘラミガキが施されている。口縁部に半円形の切り込みが1箇所みられる。

278～282は底部外面に回転糸切り痕、283は同心円状のケズリ痕がある。281・282の口縁部には灯芯油痕がある。284・285は底部成形後、直立する口縁部を貼り付ける。286は前後型合わせの鳥、287は「見ざる・聞かざる・言わざる」の顔を欠損する三猿、288は恵比寿である。

SK1003-5（図3・14、図版5・33・34）

平面形が長辺1.2m、短辺80cmの長方形を呈し、深さ40cmを測る。隣接してSK1003-4・5がある。いずれも瓦を主体とした小型の廃棄土壙である。

出土遺物には、肥前系磁器蓋289、瀬戸美濃系磁器蓋290、瀬戸美濃系陶器水甕292、堺明石系擂鉢291がある。

289は染付で、高台がハの字状に開き、畳付け無釉で離れ砂が付着している。外面に蓮弁文と円形文、口縁部内面に四方襷文、見込みは一重圏線内に変形字である。290は染付で、見込みは二重圏線内に草花文、高台内は二重圏線内に「成化年制」銘、畳付無釉である。291は口縁部外縁帯の張り出

しは強く、口縁部外面に2条、内面に1条沈線が廻る。擂目の上端はナデにより消し揃えられる。見込みは放射状文である。292は黄灰色の胎土に灰釉をかけた後、緑釉を流しかける。体部外面には陰刻と刺突で文様を施す。幅広の高台で、高台無釉で高台内に同心円状のケズリ痕、見込みに5箇所の目跡がある。

SK1004（図3・14、図版6・34）

平面形が長辺2.8m、短辺1.7mの不整長円形を呈し、深さ45cmを測る瓦主体の廃棄の土壙である。

出土遺物には、肥前系陶器甕293がある。293は褐色の硬質胎土に鉄釉をかけ体部外面および口縁部内面に白泥による刷毛目文を施す。口縁端部は外側に折り曲げ玉縁状を呈する。高台無釉で底部穿孔を施し、植木鉢に転用している。

SE1098（図3・14、図版7・33）

調査区外へ広がり、平面形が径5mの円形掘形のほぼ中央に、径90cmの円形の井戸側をもつ。井戸側は桶積上であるが、埋土を掘りきれず、桶積上については2段分を確認している。井戸掘形のライン上に径25～30cm、深さ20cmのピットが6箇所みられる。井戸の覆い屋の柱穴と考えられる。

出土遺物には、肥前系磁器碗294がある。294は染付で、外面に草花文、高台内に「大明成」銘、畳付無釉で離れ砂が付着している。

造成跡（図3・14、図版8・34）

造成土（第3層）より土師質皿295・296が出土している。いずれも底部外面に回転糸切り痕があり、295は口縁部に灯芯油痕がある。近世土師質皿とは形態を異にする。

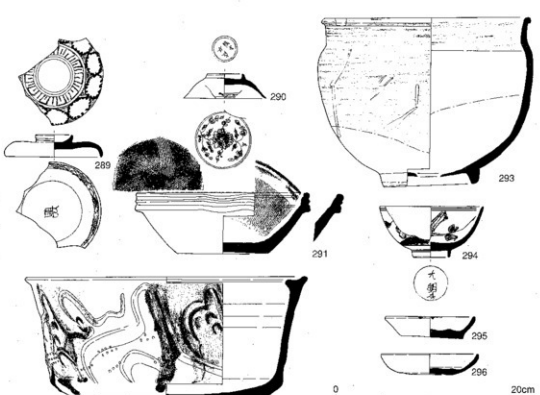


図14　土壙SK1003-5（289～292）、SK1004（293）、井戸SE1098（294）、造成土（295・296）出土遺物

ii）2000b 調査区の検出遺構と遺物

現代盛土・撹乱および整地層（第1-a層～第2-b層）除去後の第3層上面において検出した遺構と遺物である。検出遺構には徳島藩士である寺澤家の屋敷裏において確認した土壙、溝、酒部家の屋敷裏と徳島城惣構石垣の間に配された道路跡がある。

1）土壙 SK1029（図15～25、図版9・35～51）

寺澤家屋敷裏で確認した、平面形が長辺7m、短辺3mの不整長方形を呈し、深さ30cmをはかる大型の土壙である。屋敷地の最も裏手に位置し、19世紀代・幕末期の一括資料である。

出土遺物には、肥前系磁器紅皿297・小坏298～304・碗305～309・311・313～326・328・330～334・336～338・353、蓋物312・327・329、猪口335・388、段重389～391、皿396～401・403・408、鉢409・410、蓋412～422・427・429～432、仏飯器449・450、徳利451、瓶453、関西系磁器碗310・343・365～369、蓋424・426、瀬戸美濃系磁器碗339～342・344～352・354～359、皿404、蓋423・425、筆立て446、小坏485・486、瀬戸美濃系陶器碗360～364、皿402・405・478、灯明受皿463～465、鉢469・470・479、火鉢471、産地不明磁器小坏370・372、蓋428、陶器小坏371、蓋434・437～441、土瓶443・444、鉢468、植木鉢475、京信楽系陶器碗373～382、蓋物392～394、火入れ395、蓋433、乗燭447・448、灯明受皿456～459、脚付灯明受皿462、萩焼碗383・384、瑳平小坏385・387、碗386、皿406・407、徳利452、中国産皿411、大谷焼土瓶442、灯明具466・467、擂鉢472、甕473・484、鉢474・480、徳利476・477、備前蓋435、壺445、灯明皿454・455、灯明受皿460、土師質乗燭461、堺明石系擂鉢481～483、硯487、加工円盤488～491、鋳型492、火箸493、ミニチュア紅皿494～496、碗497、合子498、蓋499、鉢500、泥面子501～522、碁石523～525、土人形526がある。

297は白磁の紅皿で、外面に貝の放射脈を表現した型押成形である。

298～299は白磁で、体部が斜上方に直線的に立ち上がる。いずれも畳付無釉で、299は離れ砂が付着している。301～304は染付で、畳付無釉、303・304は離れ砂が付着している。

305は染付の端反で、外面と口縁部内面に格子文、見込み一重圏線内に斜格子文、畳付無釉で離れ砂が付着している。306・318は染付で、外面に鶴・貝・窓内に松文、口縁部内面に雷文、見込みは蛇ノ目状の二重圏線内に風景、畳付無釉である。307は染付の端反で、外面にススキ、口縁部内面に四重圏線、見込みは一重圏線内に草文、畳付無釉である。308は染付の端反で、外面と見込みに草花文、畳付無釉である。309・315・317は染付の端反で、外面に丸文、口縁部内面に屈輪文帯、見込みは二重圏線内に「壽」、幅広の高台で畳付無釉、高台内は二重方形枠内変形字で、317は焼き継ぎの痕跡がある。310・368・369は染付の端反で、外面は草花文・唐草文、口縁部内面に屈輪文帯、畳付無釉である。311は染付で、外面に風景、口縁部内面に雷文、見込み一重圏線内に環状の松竹梅文、畳付無釉である。

312は口縁部と畳付が無釉である。焼き継ぎの痕跡があり、高台内に焼継師の施した記号がある。

313・319は染付の端反で、口縁部内面に雷文、見込みに蛇ノ目状圏線内に松文、畳付無釉である。

314は染付で、外面に蕙弁文と田植え風景、口縁部内面に雷文、見込みは二重圏線内に文様、畳付無釉である。316は端反の染付で、外面は格子文に笹、畳付無釉である。320は口縁部内面に雷文、見込み一重圏線内に環状の松竹梅文、畳付無釉である。321は染付の端反で、外面にみじん唐草文と蕙弁文、口縁部内面に四方襷文、見込みは二重圏線内に環状の松竹梅文、畳付無釉である。322は染付の端反で、外面に仙芝文、見込みは一重圏線内に文様、畳付無釉である。323は染付で、縦割りの区画内に文様、見込みに宝船文、畳付無釉である。324は染付で、外面に草花文、見込みは一重圏線内

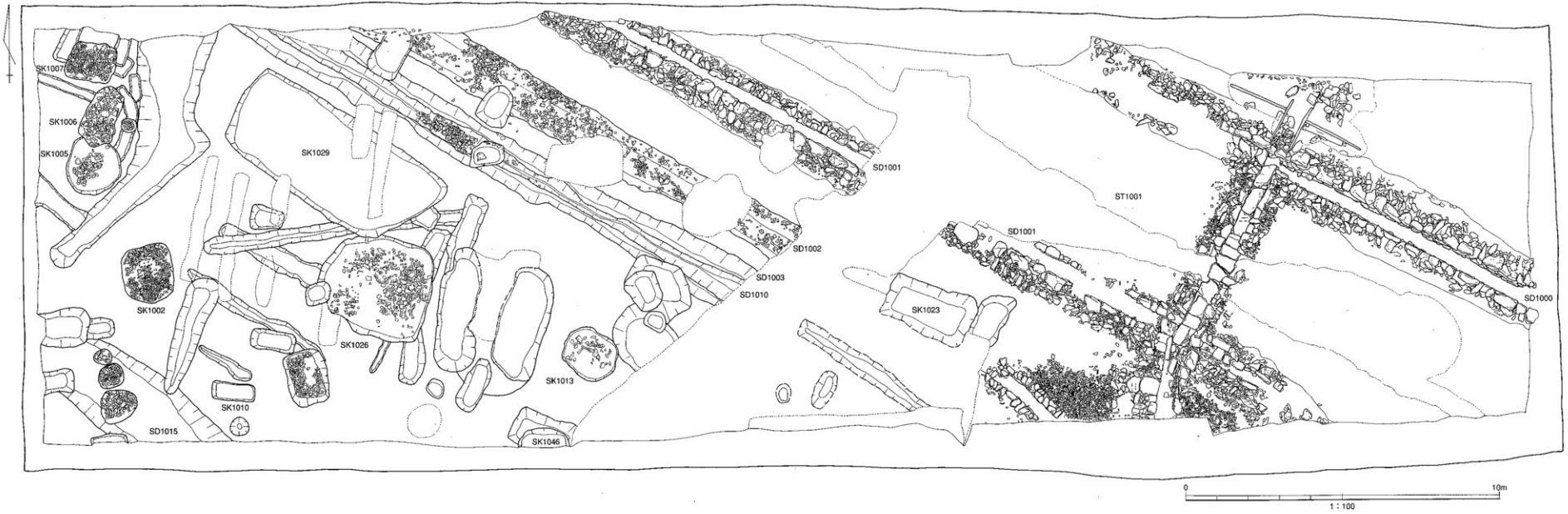


図15　2000b 調査区検出遺構

に井桁、畳付無釉である。325・330・353は染付で、外面に雪輪・竹、見込みは一重圏線内に笹、325・330は畳付無釉で離れ砂が付着している。326は染付で、外面に葉文、口縁部内面に四方襷文、見込みは二重圏線内に文様、高台はハの字状に開き畳付無釉である。

327は口縁部内面および畳付無釉、焼き継ぎの痕跡があり、高台内に焼継師が施した記号がある。

328は染付で、外面に花唐草文、口縁部内面に雷文、見込み二重圏線内に唐草文、畳付無釉である。

329は色絵染付で、外面は赤色の幾何文を下地に呉須で枠取りした窓内に赤・金・黒色の花文、口縁部内面および畳付無釉である。331は染付の端反で、外面に縦割区画に鳥・花文、見込みは蛇ノ目状の二重圏線内に花文、畳付無釉である。332は染付で、外面に梅・櫛歯文、口縁部内面に龍、見込みは二重圏線内に雲文、畳付無釉である。

333は色絵染付で、外面は蓮弁文、呉須で枠取りした窓内に赤・緑・金・黒色の上絵を施す。口縁部内面に四方襷文、見込みは二重圏線内に環状の松竹梅文、畳付無釉である。

334は染付で、外面に笹と花文、畳付無釉である。

335は染付の型打成形の輪花で、外面に花唐草文、口縁部内面に四方襷文、見込みは二重圏線内に手描き五弁花文、高台内に二重方形枠内渦福、畳付無釉である。

336は染付で、内外面と見込みに草花文、畳付無釉で、焼き継ぎの痕跡があり、高台内に焼継師の施した記号がある。337・338は染付の広東碗で、317は外面に「壽福壽」の縦文字、見込みは一重圏線内に「壽」、畳付無釉である。338は外面に龍文、見込みは一重圏線内に花文、高台内二重方形枠内に変形字、畳付無釉である。

339～340は染付の端反の小碗で、畳付無釉である。341は染付の端反で、外面に草花文、見込みは一重圏線内に「壽」、畳付無釉である。342は染付の端反で、外面に花・蝶、口縁部内面に渦文、見込みは一重圏線内に「富貴長春」銘、畳付無釉で高台内に二重方形枠内変形字である。343・344は染付の端反で、343の外面は窓に草花文、344の外面は霊芝文である。

345～347は染付の端反で、畳付無釉で、347は焼き継ぎの痕跡があり、高台内に焼継師の記号が施される。348～351は染付の端反で、358は外面に鳥文である。349はもみじ・折松葉文、350は草花文、351は区画内に菖蒲、いずれも畳付無釉で、349は焼き継ぎの痕跡があり、高台内に焼継師が施した記号がある。

353は染付の端反で、外面は花唐草文、畳付無釉、354・356は染付で、内外面に桜花散らし文、畳付無釉である。355は色絵の端反で、外面にピンク・黒色の桜花散らし文、見込みにピンク・黒色の桜花の上絵を施す。357は色絵の端反で、外面に緑・赤・黒色で人物・鼠・花文の上絵を施す。見込みに上絵で花を描き、高台内は赤色の一重方形枠内に変形字で、畳付無釉である。358は色絵の端反で、外面は雷文・龍・瑞鳥・櫛歯文の赤上絵である。口紅で、見込みに赤色の花文、高台内に赤色の方形枠内変形字である。畳付無釉である。359は染付で口縁部が内弯する。

360～363は灰白色の硬質胎土の内外面に灰釉・鉄釉をかけ合わせる。いずれも高台無釉である。

364～367は染付の端反で、364・365・367の外面は鶏、366は竹・鳥である。いずれも畳付無釉である。

370は染付で、外面は草花・鳥、見込みは瑞獣、畳付無釉である。371は淡褐色の硬質胎土に灰釉をかけ、内外面は白泥によるランダムな刷毛目文、外面に果実の鉄絵を施す。高台無釉である。

372は染付で、外面は松竹梅文、高台外面に櫛歯文、畳付無釉である。

374は黄白色の硬質胎土に灰釉をかける。高台無釉である。374は灰白色の硬質胎土に灰釉をかけ外面に上絵を施す。高台無釉である。375・378は灰白色の硬質胎土に灰釉をかける。高台無釉である。

図16　土壙 SK1029出土遺物

図17　土壙 SK1029出土遺物

376は色絵で、淡黄白色の硬質胎土に灰釉をかけ、外面は赤・黒・緑色で龍・雲文、見込みは二重圏線内に草花文の上絵を施す。畳付と高台内無釉で、高台内に七角形枠内「清」の刻印がある。

377・379～382は注連縄文碗である。灰白色の硬質胎土に灰釉をかけ、377は赤色の海老、379は赤と緑色の注連縄、380は赤色の海老、381は鉄絵と色絵の注連縄、382は注連縄の縄とウラジロの葉柄・中軸が赤色、ウラジロの葉・ワラが緑色、ユズリハが黄色で上絵される。

383は灰色、384は淡黄橙色の胎土で、内面に薬灰釉をかけ、外面はピラ掛けである。高台内に渦巻状のケズリ痕がある。

385は内外面に緑色釉をかけ、見込みに龍の陰刻、畳付無釉である。386は外面に黄色釉、畳付は無釉である。387は内外面に黄色釉、外面と見込みに龍の陰刻、畳付無釉である。

388は染付で、外面は矢筈・蓮弁文、見込みに手描き五弁花文、畳付無釉である。

389は染付で、外面は波文、口縁部と腰部は無釉である。底部外面に同心円状のケズリ痕がある。

390は色絵染付で、外面は赤・緑・黒・呉須・金色で草花文の上絵を施す。口縁部と腰部は無釉である。391は染付で、外面は亀甲・花文、口縁部無釉で焼き継ぎ痕がある。腰部無釉でアルミナ砂が付着している。

392は灰白色の硬質胎土に灰釉をかけ、外面に2条の帯線を錆釉で施す。口縁端部が内側に肥厚し高台無釉で見込みに3箇所の目跡がある。

393・394は灰白色の硬質胎土に灰釉をかける。口縁端部が内側に肥厚し、端部上面は無釉、腰部～底部が無釉で、393は見込みに3箇所、394は2箇所の目跡がある。

395は黄白色の硬質胎土に灰釉をかける。内面と腰部～高台無釉である。

396・397は染付で、型打成形の輪花である。396は内面に山水文、口銹、畳付無釉である。397は内面に草花・蝶、畳付無釉である。398は白磁で、型打成形の輪花で、内面に陽線の菊文、畳付無釉である。399は染付で、型打成形の輪花で、口銹、内面は山水文、蛇ノ目凹形高台である。400は染付で、型打成形の輪花で、外面は唐草文、内面は蜻唐草・半花菱文、見込みは環状の松竹梅文、焼き継ぎの痕跡があり、高台内に焼継師が施した記号がある。畳付無釉である。401は染付で、型打成形の輪花で、内面に龍、蛇ノ目凹形高台である。

402は灰白色の胎土に灰釉をかけ、型打成形の輪花の鍔皿である。高台無釉で高台内施釉である。

403は染付で、型打成形の輪花で、内面に菊文、高台内に6箇所のハリ支え痕、畳付無釉である。

404は染付で、型打成形の輪花で、内面に陽刻の波文、見込みに陽刻の朝顔文、畳付無釉である

405は型押成形の角皿で、内面に緑色釉をかけ、鉄絵を施す。

406・407は型押成形の小判型の皿で、黄色釉をかける。406は見込みに陽刻の花文、底部外面に3箇所のハリ支え痕と「珉平」の刻印、407は見込みに陰刻の龍、底部外面に3箇所のハリ支え痕がある。

408は染付で、内面は宝尽し文、畳付無釉で、高台内に二重圏線内「雅」銘である。

409は染付で、外面は雪輪・梅花・折松葉文、内面は梅花・氷裂文で、口銹、蛇ノ目凹形高台である。焼き継ぎの痕跡があり、高台内に焼継師が施した記号がある。

410は染付で、受口状の口縁を呈し、外面は花唐草・蓮弁文、内面は窓内に花・半花菱文、見込みは環状の松竹梅文である。畳付無釉で、離れ砂が付着、高台内は一重圏線内に「乾」銘である。

411は染付で、内面は花・鳥・青海波文、見込みに6箇所の目跡、畳付無釉で、高台内は放射状のケズリが施され、琵に施釉され、離れ砂が付着している。

412は端反の染付で、外面に桑・草花文、高台外面に櫛歯文、畳付無釉で高台内に一重方形枠内に変形字、口縁部内面に雷文、見込みは二重圏線内に草花文である。413は端反の染付けで、外面に波

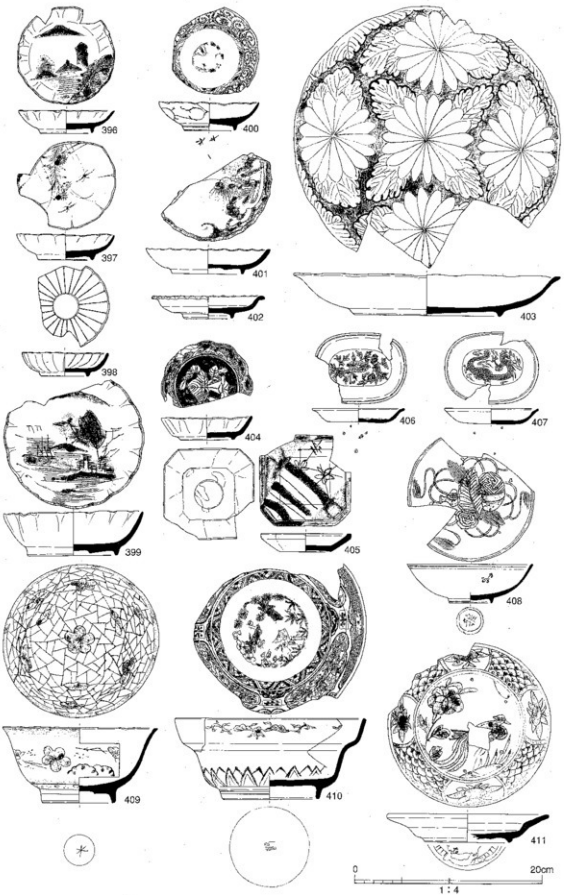


図18　土壙 SK1029出土遺物

文と窓内に草花文、畳付無釉で高台内に一重方形枠内に変形字である。414は端反の染付で、外面に文字、畳付無釉で、高台内に一重方形枠内変形字、見込み一重圏線内に「□楽□製」銘である。415は端反の染付で、外面は草花文に墨弾きの斜格子文、畳付無釉、口縁部内面に雷文、見込みは一重圏線内に環状の松竹梅文である。416は端反の染付で、外面は体部から高台内に続く花文、畳付無釉、見込みは一重圏線内に牡丹である。417は端反の染付で、外面に草花文、高台内「太明年製」銘で、碗336の文様に対応する。418は端反の染付で、外面は花文、口縁部内面と見込みに幾何文である。419は端反の染付で、外面に鶴・貝・窓内に松、高台無釉で、高台内は一重方形枠内変形字、口縁部内面に雷文、見込みは蛇ノ目状の二重圏線内に風景、碗306・308の文様に対応する。420は端反の染付で、外面は扇に山水文・鏑文、畳付無釉で、高台内に一重方形枠内変形字、口縁部内面は雷文、見込みは蛇ノ目状の二重圏線内文様である。421は端反の染付で、口縁部内面に雷文、見込みは一重圏線内に環状の松竹梅文で、碗320の蓋の文様に対応する。422は端反の染付で、外面に雪輪・竹、畳付無釉、見込みは一重圏線内に笹文、碗325・330・353の文様に対応する。

423は端反の色絵で、口縁部外面に赤色で四方襷文、体部外面は梅花・氷列文、畳付無釉で高台内に一重方形枠内変形字、口紅で、見込みに赤色の梅の上絵を施す。424は端反の染付で、外面は草花文、口縁部内面に屈輪文、見込みは一重圏線内変形字である。425は端反の染付で、外面は雲文・花唐草文、畳付無釉で高台内に一重方形枠内変形字、見込みは一重圏線内に草花文である。426は端反の染付で、外面は蝶・草花文、畳付無釉で高台内に一重方形枠内変形字、見込みは一重圏線内に「壽」である。427は染付で、外面は「壽福」の綬文字、畳付無釉で、見込みは二重圏線内に「壽」で、碗337の文様に対応する。428は端反の染付で、外面は草花文、畳付無釉で、見込みは二重圏線内「壽」である。

429は染付の段重の蓋で、外面に牡丹唐草文、橋摘みを貼り付ける。口縁部内面無釉で、焼き継ぎの痕跡がある。

430は色絵の段重の蓋で、外面は赤・緑・黒・金色・呉須で草花文の上絵を施す。橋摘みは欠損、口縁部内面無釉で、段重390の文様に対応する。

431は染付で、外面は宝尽し文、宝珠形の摘みを貼り付ける。口縁部内面無釉で、アルミナ砂が付着している。432は染付で、外面は蝶・草花文で、花形の摘みを貼り付ける。口縁部内面無釉である。

433は急須の蓋で、外面は白化粧土をかけ緑色釉と鉄釉で捻子文を施す。宝珠形の摘みを貼り付け摘みの横に1箇所穿孔を施す。内面は無釉である。

434は土瓶の蓋で、外面に白イッチンをかける。巴形のケズリ痕のある宝珠形の摘みを貼り付ける。内外面無釉である。

435は壺の蓋で、皿形を呈し中央に摘みを貼り付ける、外面に塗土を施す。

436は急須の蓋で、淡黄白色の胎土で、外面に鉄釉をかけ、摘みを貼り付ける。

437は土瓶の蓋で、外面に灰釉をかけ、摘みを貼り付ける。内面無釉である。

438・441は土瓶の蓋で、外面に白泥による打刷毛を施し灰釉をかけ、亀形の摘みを付ける。

439は土瓶の蓋で、外面に白泥による打刷毛を施し灰釉をかけ鉄絵を施す。口縁部外面に1条の沈線が廻る。巴形のケズリ痕のある宝珠形の摘みを貼り付け、摘み中央に貫通していない小穴がある。

440は土瓶の蓋で、淡橙色の胎土の外面に捻子文の白イッチンをかける。巴形のケズリ痕のある宝珠形の摘みを貼り付ける。

442は外面に鉄釉をかけ、底部無釉で、三足を貼り付ける。443は外面に灰釉をかけ、白イッチンかけの文字と白泥に緑色釉と鉄釉で布袋の上絵を施す。外面はカキ目が顕著で、茶漉しは三穴で、口縁

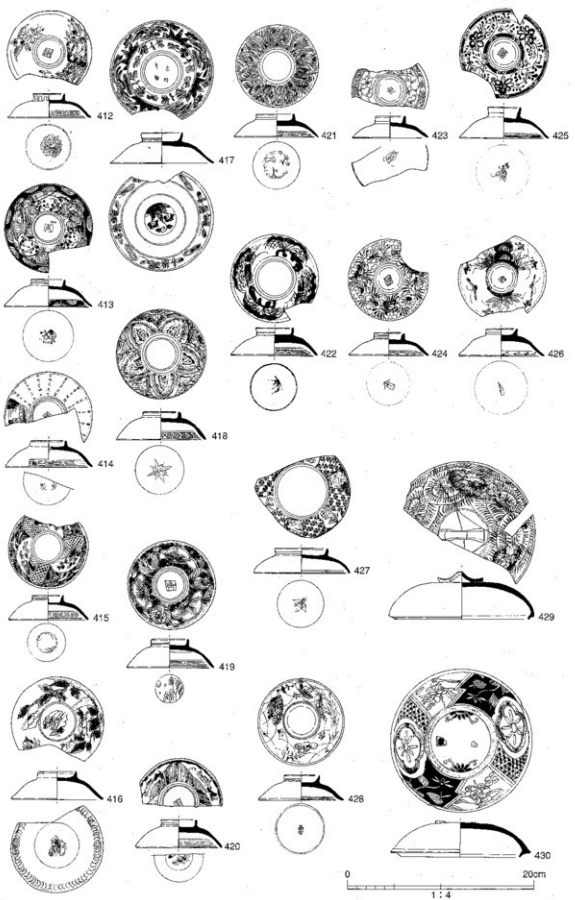


図19　土壙 SK1029出土遺物

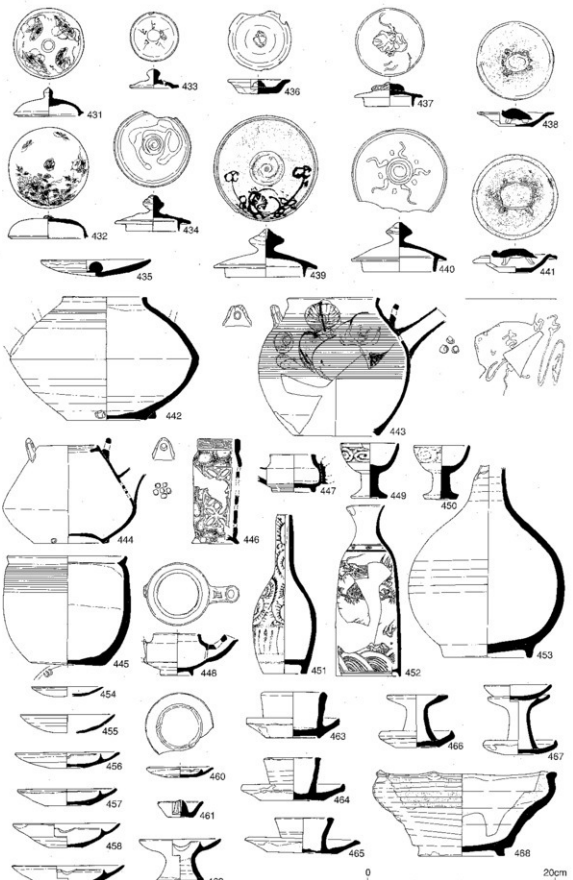


図20　土壙 SK1029出土遺物

部内面と底部無釉である。

444は橙色の胎土に柿釉をかけ、底部に三足を貼り付ける。

445は口縁部～外面に塗土を施し、外面上位にカキ目が顕著である。底部に刻印がある。

446は染付で、口縁部外面に雷文、体部は花文の透かしが施される。

447・448は灰白色の硬質胎土に灰釉をかけ、口縁部上面と底部は無釉である。447は把手と注ぎ口は欠損、448は把手を欠損し、注ぎ口上面に長方形の窓を切り込む。

449・450は染付で、外面に蛸唐草文、底部無釉である。

451は染付で鶴首形の御神酒徳利である。外面に蛸唐草文、畳付無釉で離れ砂が付着している。

452は黄色釉をかけ、外面に龍・日輪文の陰刻、畳付無釉である。

453は白磁で、畳付無釉で離れ砂が付着している。

454・455は内面に塗土を施す。

458～459は灰白色の胎土で、内面に灰釉をかける。外面と仕切りの端部は無釉である。仕切りには浅いU字状の切り込みが施される。

460は内面に塗土を施し、仕切りに3箇所の浅いU字状の切り込みが施される。

461は灯芯用の突起に縦の切り込みを入れ、突起の上端と口縁部に灯芯油痕がある。

462は灰白色の胎土に灰釉をかけ、仕切り上端は無釉、仕切りの切り込みは1箇所、底部無釉である。

463～465は灰色の硬質胎土に灰釉をかけ、底部外面無釉である。

466・467は褐色の胎土に鉄釉をかけ、底部外面無釉である。466は上皿が外れている。467の受皿仕切りに小溝が1箇所切り込まれている。

468は口縁の平面形が梅形を呈する梅形鉢である。淡橙色の胎土に灰釉をかけ、白・青色釉を流しかけする。畳付無釉である。

469は黄白色の胎土で、外面に鉄釉をかけヘラ彫りの文様を施し、口縁部より内外面に緑・白色釉をかけ流す。底部外面は塗土を施すが、畳付は一部露胎である。見込みに6箇所の目跡、高台内に7箇所の目跡、畳付に重ね焼きの痕跡がある。

470は灰白色の胎土で、外面に灰釉をかけ、口縁部から緑・白色釉をかけ流す。高台内に塗土を施し、畳付無釉である。見込みに7箇所の目跡、高台内に6箇所の目跡がある。口縁部5箇所に横位より押圧を加え窪みをもたせる。

471は灰白色の胎土で、外面にスタンプによる文様を施し黄色釉をかける。内面と底部外面に塗土を施す。見込みに7箇所の目跡、底部に三足を貼り付ける。

472は褐色の胎土で、口縁部内面～外面に鉄釉をかけ、高台無釉である。口縁部外縁帯に2条の凹線が廻る。473は褐色の胎土で、鉄釉を内外面にかけ、底部無釉である。474は外面に鉄釉をかけ、底部無釉である。

475は橙色の胎土で、口縁部から鉄釉をかけ流す。底部に墨書の痕跡ある。

476・477は褐色の胎土で、鉄釉をかける。476は肩部に「福鳩屋」の陰刻、畳付・高台内無釉で畳付に離れ砂が付着している。477は肩部に「油助↑」の陰刻、畳付・高台内は無釉である。

478は灰黄色の胎土で、内外面に灰釉をかけ、高台無釉である。見込みに7箇所の目跡がある。高台は幅広で、高台内に同心円状のケズリ痕がある。

479は灰白色の胎土で、内外面に灰・緑釉をかけ、高台無釉である。見込みに5箇所の目跡がある。底部外面中央に円刻状のケズリ痕がある。

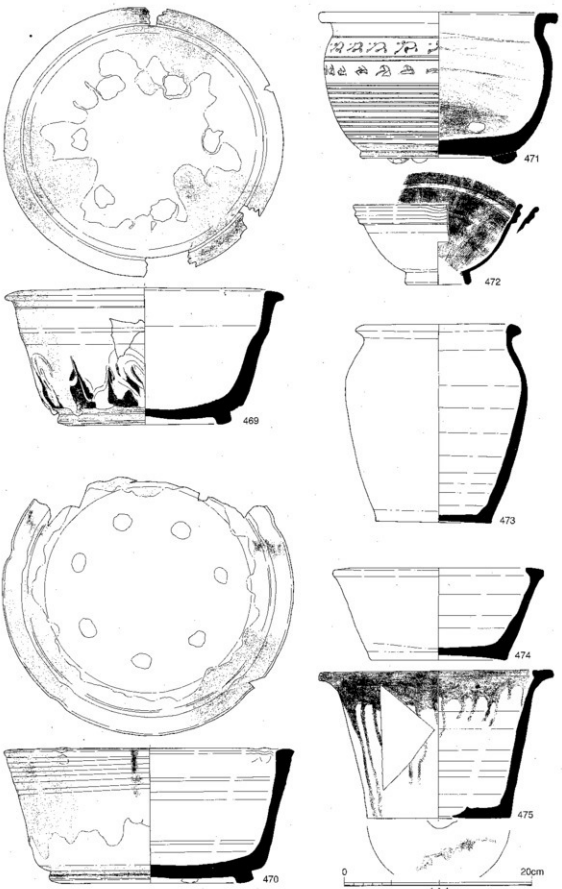


図21　土壙 SK1029出土遺物

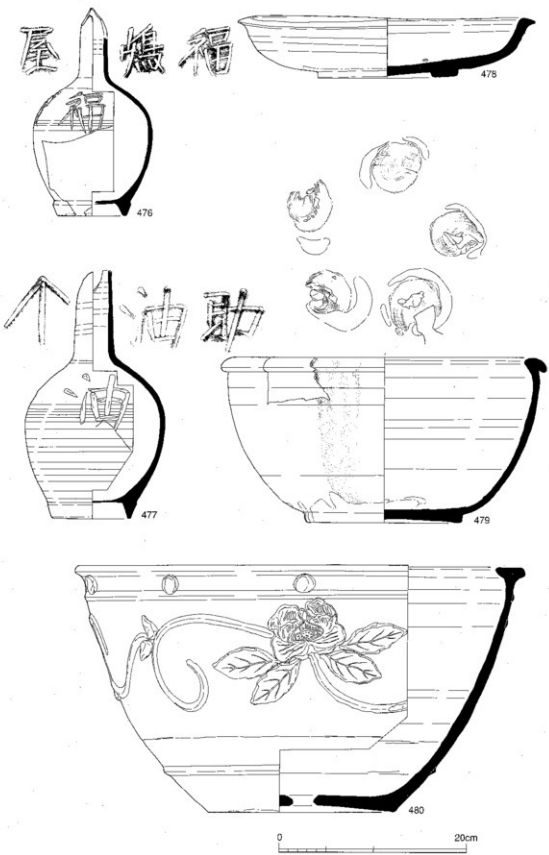


図22　土壙 SK1029出土遺物

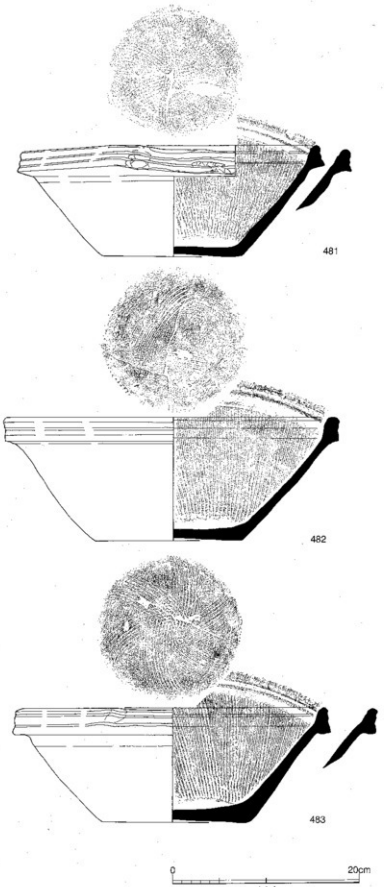


図23　土壙 SK1029出土遺物

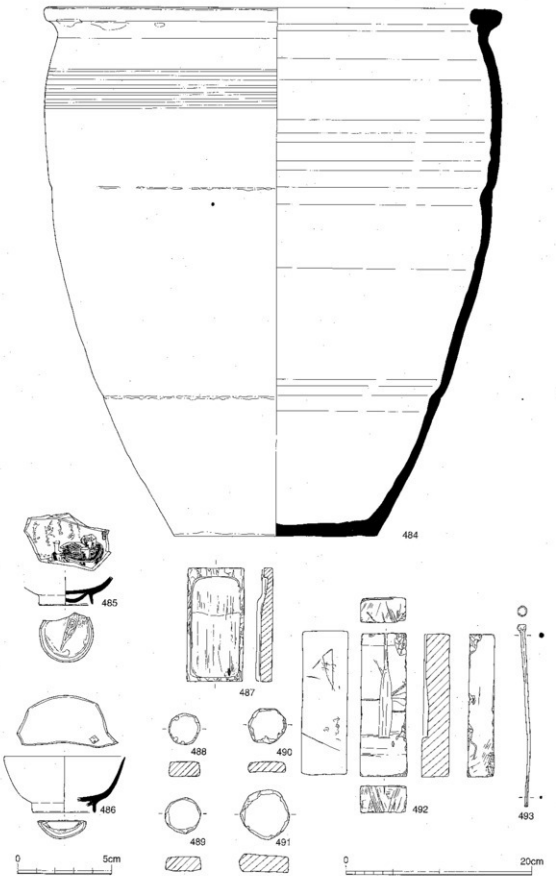


図24　土壙 SK1029出土遺物

480は橙色の胎土で、内外面に鉄釉をかけ底部外面は無釉、外面に陽刻の円形と花唐草文を貼り付ける。口縁部端面に14箇所の目跡、底部外面に4箇所の目跡、底部穿孔し植木鉢に転用している。

481は褐色、482・483は橙色の胎土で、外縁帯の張り出しは強く、口縁部外面に1～2状の凹線が廻る。擂目の上端はナデにより消し擂えられる。481・483の見込みは放射状文で、重ね焼きの痕跡がある。482の見込みは三角形文で火襷の痕跡がある。

484は橙色の胎土で、外面に鉄釉をかけ、底部外面は無釉で砂が付着している。内面は鉄釉の刷毛塗りである。口縁部上面に15箇所の目跡、見込みに5箇所の目跡がある。

485・486は同一個体で、白磁に上絵を施す。見込みに酒宴の膳・金彩の文字、高台内に女性の陰部を表現している。

487は泥岩製である。488・489・491は瓦片、490は陶器片を円盤状に打ち欠いたものである

492は鋳型である。493は銅製である。

494～496は型押成形で、494は白磁、495～500は陶器、貝の放射脈を表現している。495・497は内面に緑色釉、496は黄色釉、498は灰釉、499は外面に褐色釉、500は褐色釉をかけている。

501～522は型押成形で、501は秤、502は柿、503は魚、504は犬、505は瓶、506は人面、507は太鼓、508～511は貝、512は団扇、513・515は宝珠、514は釜、516は小槌、517は鮑、518は鬼斗、519・520は桝、521・522は猪である。

523は土製、524・525は泥岩製である。

526は前後型合せ成形の天神である。

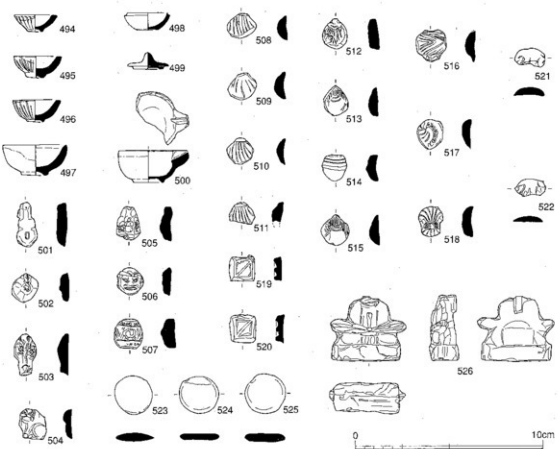


図25　土壙 SK1029出土遺物

2）土壙 SK1006・1026・1010・1002・1007・1013（図15）

寺澤家屋敷裏で確認した土壙である。SK1006は平面形が長辺２m、短辺90cmの不整長円形を呈し、深さ15cmを測る。SK1005・1007が隣接して存在し、小規模な廃棄が繰り返されている。

SK1026は平面形が一辺1.4mの不整方形を呈し、深さ25cmを測る。SK1010は平面形が長辺1.5m、短辺50cmの長円形を呈し、深さ20cmを測る。SK1002は平面形が一辺1.7mの不整方形を呈し、深さ20cmを測る。SK1007は平面形が長辺1.7m、短辺1.3mの不整長方形を呈し、深さ50cmを測る。SK1013は平面形が長辺1.8m、短辺1.4mの不整長円形を呈し、深さ20cmを測る。いずれも、瓦・礫を主に廃棄した土壙と考えられるが、陶磁器類の遺物は少量である。18世紀後葉～19世紀代の土壙である。

SK1006（図26、図版10・51）

肥前系磁器碗527・528・531、鉢532、蓋533・534、瀬戸美濃系磁器529・530、大谷焼535、瓦質風炉536がある。

527～531は染付である。527は外面に蝶・草花文、畳付無釉で離れ砂が付着している。528は外面に七宝繋ぎ文・丸文、口縁部内面に四方襷文である。531は外面に亀甲繋ぎ文、口縁部内面に四方襷文、見込みは二重圏線内に亀甲繋ぎ文、高台がハの字状に開き、畳付無釉で離れ砂が付着している。

529・530は染付の端反で、外面は草花文、口縁部内面に唐草文、見込みは二重圏線内に文様、畳付無釉である。530は外面に折松葉文・箒、「壽福」字、見込みに「壽」字、高台はハの字状に開き、畳付無釉である。532は青磁の型打成形の輪花で、蛇ノ目凹形高台である。

533は染付の端反で、外面に山水文、畳付無釉である。534は色絵染付で、外面は呉須の渦唐草文赤・黒・緑・金色の花文の上絵を施す。畳付無釉で、高台内に「冨貴長春」銘、口縁部内面は四方襷文、見込みは二重圏線内に環状の松竹梅文である。

535は褐色の胎土に鉄釉をかけ、外面に「内魚町　申秋　岡田屋」の陰刻、畳付無釉で砂粒が付着している。

536は口縁部から U 字状に切り込み、内面に受けを貼り付ける。底部外面に三足を貼り付け、三足のいずれも穿孔され、外面にはヘラミガキが施されている。

SK1026（図26、図版52）

肥前系磁器碗537・538、蓋541・542、壺543、京信楽系陶器碗539、ミニチュア碗540、備前鉢544がある。

537・538は青磁染付で、口縁部内面に四方襷文である。

539は灰黄色の胎土に灰釉をかけ、外面・見込みに上絵を施す。高台無釉である。540は灰黄色の胎土に灰釉をかけ、高台無釉のミニチュアである。

541は染付で、口縁部内面無釉の合子の蓋である。542は染付で、外面に鶴・貝・窓内に松、高台無釉で、高台内は一重方形枠内変形字、口縁部内面に雷文、見込みは蛇ノ目状の二重圏線内に風景で、SK1029出土の蓋419と同文様である。543は白磁の短頸壺で、口縁部上端無釉である。

544は橙色の胎土で、底部を穿孔し、植木鉢に転用している。

SK1010（図26、図版52）

肥前系磁器紅皿545、碗546・547がある。

545は白磁の型押成形で、貝の放射脈を表現している。高台無釉である。546・547は染付で、546は外面に山水文・口縁部内面に四方襷文、547は外面に一重網目文である。

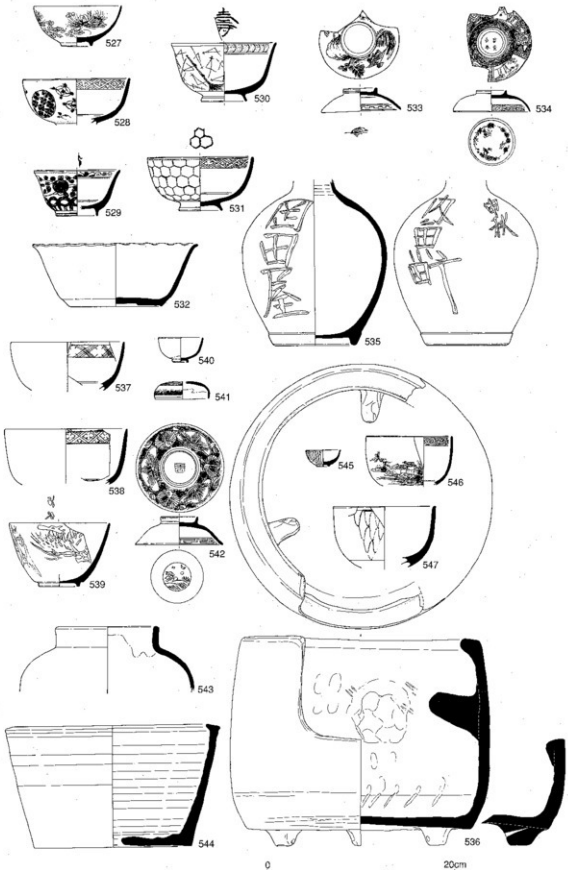


図26　土壙 SK1006（527～536）、SK1026（537～544）、SK1010（545～547）出土遺物

SK1002（図27、図版52）

肥前系磁器紅皿548、碗549・550、蓋551・552、皿553・554、産地不明陶器鉢555、大谷焼556丹波焼甕557、軒丸瓦558がある。

548は白磁の型押成形で、貝の放射脈を表現している。高台無釉である。

549・550は染付で、549は外面にコンニャク印判のもみじ、550は草花散らし文である。

551・552は染付で、外面に兎、畳付無釉である。552は高台がハの字状に開き、口縁部内面に四方襷文、見込みは二重圏線内に花文で、畳付無釉である。

553・554は染付で、553は内面に花唐草文、二重圏線内に蛇ノ目釉剥ぎし、重ね焼きの痕跡がある。見込み中央にコンニャク印判による五弁花文、畳付無釉で離れ砂が付着している。554は外面唐草文、内面は半菊花文、二重圏線内に蛇ノ目釉剥ぎが施され、アルミナ砂が付着している。畳付無釉である

555は赤褐色の硬質胎土に鉄釉をかけ、底部無釉である。口縁部下に半円状の穿孔を施し、U字状の注ぎ口を貼り付ける。556は褐色の硬質胎土に鉄釉をかけ、口縁部を内外に拡張し、口縁部外面にイゲロを貼り付ける。口縁部上面に目跡がある。557は灰色の胎土で、外面に自然釉がかかる。口縁部上面・体部外面にカキ目が施される。558は家紋瓦で左万字である。

SK1007（図27、図版53）

肥前系磁器碗560、筒形碗561、蓋562・563、仏飯器575、大谷焼灯明具559がある。

559は灯明具の上皿で、口縁部に灯芯油痕がある。

560は広東碗の底部で、見込みに鷺、畳付無釉である。561は染付で、外面に草花文、口縁部内面に四方襷文、畳付無釉である。

562・563は染付で、562は口縁部内面に雷文、畳付無釉、563は高台がハの字状に開き、口縁部内面に四方襷文、見込みは二重圏線内にコンニャク印判による五弁花文、畳付無釉である。

SK1013（図27、図版53）

肥前系磁器小坏564、碗565～568、蓋570・571、仏飯器575、産地不明陶器鉢569、京信楽系陶器鍋572・573、皿574、焼塩壺576、加工円盤577がある。

564は染付で、外面に雨降文、畳付無釉で離れ砂が付着している。

565～568は染付で、565は外面にコンニャク印判による文様で畳付無釉、566は外面に菊花・氷裂文で畳付無釉、567は外面に萩唐草文、568は外面に花唐草文・窓内に花文、蓮弁文で、口縁部内面に四方襷文、見込みは二重圏線内に如意頭文である。

569は灰白色の胎土に灰釉をかけ、輪花の型打成形の菊鉢で、畳付無釉で離れ砂が付着している。

570は青磁染付で、口縁部内面に四方襷文、見込みは二重圏線内に草花文、高台畳付無釉で高台内に二重方形枠内渦福である。571は染付の段重の蓋で、外面に草花文、橋摘みを貼り付け、口縁部内面無釉でアルミナ砂が付着している。

572は黄橙色の胎土に灰釉をかけ、口縁部に取手を貼り付ける。573は灰白色の硬質胎土に鉄釉をかけ、口縁端部を内側に折り巻き肥厚し、口縁部に取手を貼り付ける。

574は黄灰色の硬質胎土に灰釉をかけ、内面は蘂・草花文の上絵を施す。口縁端部にU字形の圧痕があり、高台無釉である。575は染付で、外面に輪宝文、畳付無釉である。

576は粘土板成形で蓋受けをもち、「泉湊伊織」の刻印がある。577は瓦片を円盤状に打ち欠いたものである。

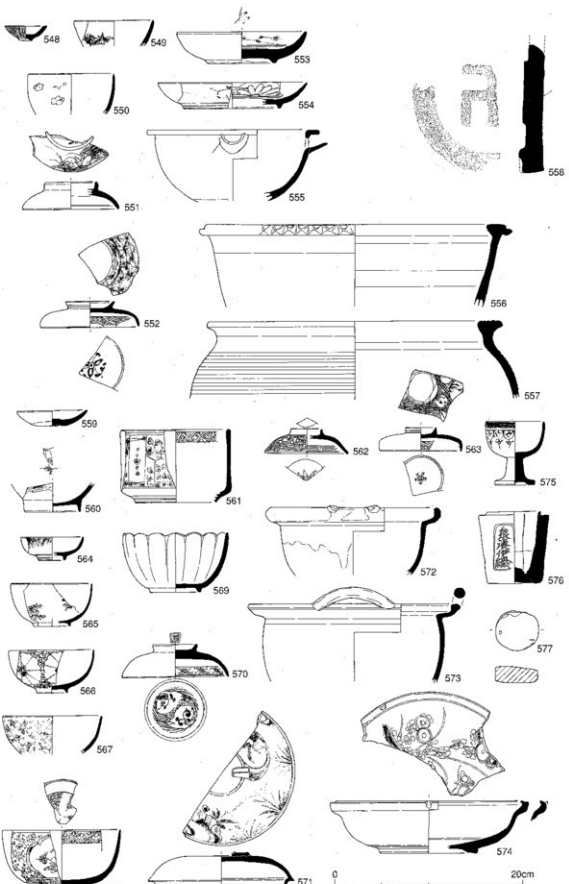


図27　土壙 SK1002（548～558）、SK1007（559～563）、SK1013（564～577）出土遺物

3）道路 ST1001側溝 SD1000・1001・SD1002・1003・1010・1015（図15・図版11～15）

寺澤家屋敷裏に面する道路および溝である。道路と溝はすべて並行している。

道路ST1001は寺澤家屋敷の裏側と徳島城惣構石垣の間に敷設されたもので、幅4.5mで両側に石組の側溝 SD1000と SD1001を付設する。SD1000・10001は幅50cmを測り、SD1000は東側では深さ60cmを測り石組残存が比較的良好であるが、部分的に矢筈積がみられ、また溝の底部や石組にセメントが貼られていることから、明治時代以降に改修が繰り返されている。その他の箇所では、溝の石組は1～2段で深さは20～30cmを測り、本来の石組の基底部が残存していると考えられる。

道路ST1001の南側には、幅90cm、深さ30cmを測る SD1002、幅80cm～1m、深さ20cmを測る SD1003が並行する。また、SD1003の同位置には深さ70cmを測る SD1010が存在するが、SD1003と1010は同一溝と考えられる。そして、さらに南には、幅2.2m、深さ80cmを測る SD1015がみられる。いずれもその方向性から、寺澤家屋敷の裏側における屋敷界の溝であり、出土遺物より SD1015（17世紀中葉）→1010・1003（18世紀中・後葉）→1002（19世紀前・中葉）と寺澤家屋敷裏側における屋敷界の変遷を示すものと考えられる。特に、SD1015から SD1010・1003への移行時における溝の規模と配置箇所の変化は大きい。

SD1001（図28、図版54）

肥前系磁器皿578、大谷焼鉢579がある。

578は染付で、外面に唐草文、579は暗灰色の硬質胎土に鉄釉をかけ、口縁部を内外に拡張し、口縁部外面にイゲロ、口縁部上面に目跡がある。

SD1002（図28、図版54）

肥前系磁器碗580～584、蓋586～590、京信楽系陶器碗585、大谷焼甕591、瀬戸美濃系陶器植木鉢592、焼塩壺593、泥面子594～596、碁石597、加工円盤598がある。

580～584は染付の端反で、口縁部内面に雷文、見込みは一重圏線内に環状の松竹梅文、畳付無釉である。581は染付で、見込みは一重圏線内に環状の松竹梅文、畳付無釉である。582・583は染付の広東碗で、畳付無釉である。584は染付で、外面に富士山、口縁部内面は雷文である。

585は黄白色の胎土に灰釉をかけ、外面に梅の上絵を施す。

586・587は染付で、586は端反、畳付無釉で離れ砂が付着している。587は外面に草花文、高台内一重方形枠内渦福、畳付無釉である。

588・589は染付で、588は型打成形で、口銹、内面は型紙摺り、外面・高台内にコンニャク印刻の文様、畳付無釉である。589は、内面に斜格子文、見込みは蛇ノ目釉剥ぎで重ね焼きの痕跡がある。畳付無釉で離れ砂が付着している。590は染付で蓋物の蓋である。口縁部内面無釉である。

591は橙色の硬質胎土に鉄釉をかける。592は黄白色の胎土に灰釉をかけ、外面に風景、口縁部上面に山形文の鉄絵を施す。内面・底部外面は無釉で、底部に三足を貼り付ける。

593は粘土板成形で、蓋受けをもたない。598は瓦片を円盤状に加工したもので、「大□川」の刻印がある。

SD1003（図28、図版54）

肥前系磁器碗599、鉢600がある。599は青磁染付で、口縁部内面に四方襷文である。

600は染付で、外面は龍・雲文である。

SD1010（図28・29、図版54・55）

肥前系磁器碗601～607、皿608・618～620、蓋物611、筒形碗612、蓋614・616・617、香炉625、京信楽系陶器碗609・610・626・627、蓋615、筆入れ621、瀬戸美濃系陶器皿613、土師質皿622、備前皿623・624、堺明石系擂鉢628、軒丸瓦629がある。

601～606は染付で、外面は草花文、畳付無釉で離れ砂が付着し、高台内にも砂粒が付着している。602は外面に花文、畳付無釉で離れ砂が付着している。603は外面に笹文、畳付無釉で離れ砂が付着している。604は外面に氷裂文、口縁部内面四方襷文、見込みは二重圏線内に手描きの五弁花文で、畳付無釉である。605は外面に草花文、畳付無釉である。606は外面に松竹梅・蓮弁文、口縁部内面に四方襷文、見込みは二重圏線内に環状の松竹梅文、畳付無釉である。607は青磁染付で、口縁部内面に四方襷文、見込みは二重圏線内に花文、畳付無釉で離れ砂が付着、高台内二重方形枠内渦福である。

608は染付で、見込みは蛇ノ目釉剥ぎ、高台無釉である。609は黄白色の胎土に灰釉をかけ、外面に草花文の鉄絵、高台無釉で、高台内に円錐状のケズリ痕がある。610は灰白色の胎土に灰釉をかけ、高台無釉で、高台内に円錐状のケズリ痕がある。611は染付で、外面に草花文、口縁部無釉、畳付無釉で離れ砂が付着している。612は染付で、口縁部内面に四方襷文である。613は輪花の型打成形の腰皿で、畳付無釉である。614は青磁染付で、口縁部内面に四方襷文、見込みは二重圏線内に草花文、畳付無釉で、高台内に二重方形枠内渦福である。

615は灰白色の胎土に灰釉をかけ、草花文の鉄絵を施す。畳付無釉である。616は染付で、外面に笹・梅文、口縁部内面に四方襷文、見込みは二重圏線内に環状の松竹梅文、高台はハの字状に開き、畳付無釉である。617は染付で、外面に松・竹・草花文、口縁部内面に四方襷文、畳付無釉である。

618～620は染付で、618は型打成形で、外面は唐草文、内面は型紙摺りで、見込みに一重圏線、畳付無釉である。619は輪花の型打成形で、外面は唐草文、内面は牡丹唐草文、渦唐草文、見込みは環状の松竹梅文、蛇ノ目凹形高台で、底部露胎部に離れ砂が付着している。620は外面に唐草文、内面は草花文、畳付無釉で離れ砂が付着している。

621は黄白色の胎土に灰釉をかけ、竹筒形で梅花を貼り付ける。底部外面無釉である。622は底部外面に回転糸切り痕、623・624は内面に塗土を施し、口縁部に灯芯油痕がある。625は青磁で、高台内と内面は無釉である。底部に型押成形の三足を貼り付ける。627・628は灰白色の胎土に灰釉をかけ赤色の上絵で三島暦を写した暦茶碗である。628は外縁帯の張り出しは弱く、口縁部内面に1条凸帯が廻る。629は家紋瓦で、寺澤家の替紋である丸ノ中結び文である。

SD1015（図29、図版55）

肥前系磁器碗630・631、陶器碗632～634、皿636～643、京信楽系陶器碗635、備前擂鉢644、土師質皿645～648がある。

630・631は染付で、631は畳付無釉で離れ砂が付着している。632は灰白色の胎土に灰釉をかけ、畳付無釉で離れ砂が付着、高台内に円錐状のケズリ痕がある。633・634は橙色胎土で、633は鉄釉をかけ高台無釉、畳付に目跡、高台内に円錐状のケズリ痕がある。634は灰釉をかけ、高台無釉、635は灰白色の胎土で、灰釉をかけ、高台無釉である。

636は褐色の硬質胎土で、灰釉をかけ底部無釉である。底部外面に回転糸切り痕と3箇所の目跡がある。637は褐色の硬質胎土で、灰釉をかけ、高台無釉である。見込みに3箇所の砂目と重ね焼きの痕跡がある。637は褐色の硬質胎土で、灰釉をかけ、高台無釉である。内面底部から体部に段を生ずる。畳付に4箇所の目跡、見込みに4箇所の砂目がある。639は灰色の硬質胎土で、灰釉をかけ畳付

図28　溝 SD1001（578・579）、SD1002（580～598）、SD1003（599・600）、SD1010（601～627）出土遺物

無釉である。高台内に円錐状のケズリ痕がある。640は灰色の硬質胎土で、灰釉をかけ、口縁部が外反し、高台内に円錐状のケズリ痕がある。畳付無釉で畳付に４箇所の目跡がある。641は口唇部に溝をめぐらす溝縁皿である。黄灰色の硬質胎土で、灰釉をかけ、高台無釉、畳付に離れ砂が付着、見込みに胎土目がある。642は褐色の硬質胎土で、高台無釉で離れ砂が付着している。内面底部から体部にかけて段を生じ口唇部はわずかに直立する。見込みに４箇所の砂目がある。643は型打成形で口縁部をなぶり口にする。褐色の硬質胎土に灰釉をかけ、底部無釉、内面に鉄絵を施す。高台と見込みに３箇所の砂目、口縁部内面に重ね焼きの痕跡がある。644は外縁帯の張り出しは強く、口縁部外面に２条凹線、口縁部内面に鈍い凸帯が廻る。播目の上端は揃わず、播目は蜜に施されない。外縁帯下に重ね焼きの痕跡がある。645～648の底部外面には回転糸切り痕、646～648の口縁部には灯芯油痕がある。

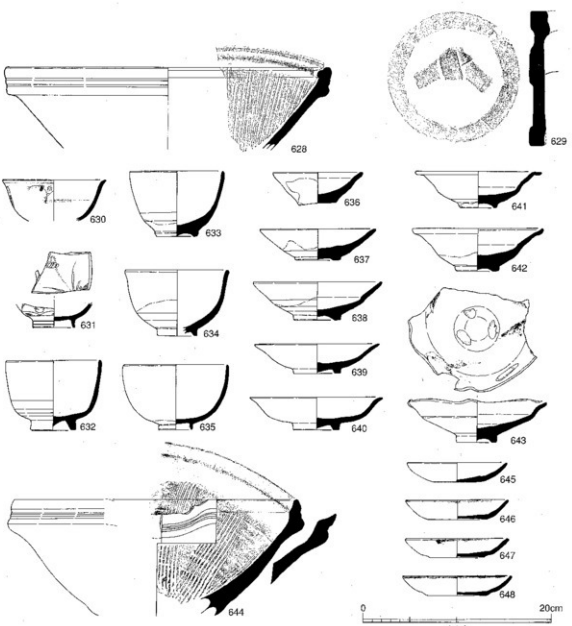


図29　溝 SD1010（628・629）、SD1015（630～648）出土遺物

第3節　調査成果のまとめ

2000a 地区の調査地は、寺澤家屋敷の表側にあたることから建物跡の確認が予想されたが、後世の土地の攪拌により屋敷表の遺構の残存は良好ではない。ただ廃棄土壙などの遺構が集中する空間と遺構自体の密度が疎になる空間が比較的明瞭に区別される。おそらく、遺構密度が疎なる空間で、しかも廃棄土壙が全く混在しない領域に建物があり、屋敷裏側など建物を取り巻く空間に廃棄土壙や井戸などの諸遺構が存在する土地利用形態であると考えられる。また、建物部については、整地を行うことで周辺部と高低差を持たせていた可能性もあり、高所であるが故に、後世の土地の攪拌による建物柱穴の削平が著しく、遺構残存の悪さとして表れているのかもしれない。

屋敷の表側に造られた池 SN1071は、庭の一部を構成するものと考えられる。池 SN1071は粗割りした結晶片岩を護岸に多用し、階段状の昇降部を設けるなど立体的な造形により池の意匠が高められている。当時の寺澤家当主の趣向の一端が、屋敷における作庭として表現されているのであろう。

池 SN1071出土の荷札木簡に示された「松茸」は淡路城下の特産品であり、また、「大根」は寺澤家の所領から運ばれたものかどうかは明確ではないが、日常の食生活の主食となる米麦以外の野菜類を調達している資料であり、城下町における武家社会の調達品の高級性と多様性が窺える(1)。

また、徳島城下町建設に伴う盛土造成跡についてであるが、今回の調査地は、昨年度の調査地の東方に位置し、城山の東南部で微高地を形成する良好なシルト層の堆積がみられず、旧助任川に対して旧地形が低傾斜する地域である。低位帯に盛土を施し武家地化するため、異なる質の土砂を挟在しながら旧助任川の川筋に並行して大量の土砂を押し込んでいく造成方法には、天正14（1586）年に始まるとされる徳島城下町建設当初の姿が読み取れる。

2000b 地区の調査地は寺澤家屋敷の裏側および道路にあたる。この調査区も後世の大規模な撹乱を受けている。道路 ST1001は徳島城惣構石垣に並行するものであるが、部分的にセメント補修がみられることから、明治時代以降も使用されている。この ST1001に並行する溝 SD1002・1003・1010・1015は、寺澤家屋敷裏側の屋敷界を示す溝と考えられ、屋敷界の移動が想定される。また、2000a・2000b 地区はともに寺澤家屋敷に該当するが、SD1015の南側の2000a 地区では主に18世紀代の遺構がみられるのに対し、SD1015の北側の2000b 地区では大型土壙 SK1029をはじめ19世紀代・幕末の遺構がみられることから、屋敷内における廃棄箇所が敷地の周縁部にまで拡散する状況がみられる。

寺澤家屋敷の裏側は、当初 SD1015が屋敷界として機能していたが、17世紀の中葉以降、SD1003・1010が屋敷界として継承される。屋敷裏が10m 程度、全面的に押し広げられることから、SD1015が屋敷界として果たした指標は曖昧なものであったのかもしれない。また、後に屋敷界の溝となる SD1003・1010の規模は縮小する。これは、1999年調査の酒部と寺澤家の屋敷界において確認した溝 SD1008から SD2007・SD1002・1003へ継承される溝の縮小化およびその変遷時期に類似する(2)。17世紀中葉を契機に、城下町建設当初に屋敷界に設けられた溝は、中世的な屋敷区画の意識から脱却し、近世武家屋敷として再整備される過程で、屋敷界ごとに異なる機能をもつ溝が新たに設けられる。そこには従来の屋敷界の溝に対する意識も変容しており、時間的・立地的な考慮を踏まえなければ、屋敷を界する溝の機能を単純に捉える訳にはいかない。

註）

(1)　根津寿夫「徳島藩中老酒部家出土の荷札木簡について」『論集　徳島の考古学』2002。

(2)　徳島市教育委員会『徳島市埋蔵文化財発掘調査概要』13、2003。

写　真　図　版

池 SN1071　　東から

池 SN1071階段部　　南から

図版2

池 SN1071　　南から

池 SN1071堆積状況　　北から

池 SN1071石組状況　　西から

池 SN1071石組断ち割り　　南西から

土壙 SK1028遺物出土状況　北から

土壙 SK1028遺物出土状況　北から